

Vol.31

令和6年5月31日
防衛大学校同窓会機関紙

小原台だより



電子版第9号

◆防衛大学校同窓会長からのご挨拶

◆学校長に聞く

◆防衛大学校関連

◇副校長に聞く

◇令和5年度カッター競技会について

◇令和5年度水泳競技会の観戦及び激励

◇令和5年度同窓生等著作図書の贈呈

◇令和5年度防衛学特論研究レポート発表会

◇留学卒業生祝賀行事 7か国18名の卒業を祝う

◇令和5年度断郊競技会の激励

◆同窓生は今

◇第67期生に聞く

◇今人生、真っ盛り（29期生）

◆活動報告

◇令和5年度防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）

◇第46期生ホーム・ビジット・デー（HVD）

◇第23期生ホーム・カミング・デー（HCD）

◇第10期生・第11期生ホーム・カミング・デー2（HCD2）

◇第26回防衛大学校同窓会テニス大会

◇第25回防衛大学校同窓会ゴルフ大会

◇第23回防衛大学校同窓会囲碁大会

◆会長ルーム・活動記録

◇令和5年度防衛大学校入校式典

◇令和5年度顕彰碑献花式への参加

◇令和5年度開校記念祭への参加

◇令和5年度代議員会結果報告

◇令和5年度防衛大学校卒業式典

◆連絡事項

◆編集部後記

◆ 防衛大学校同窓会長からのご挨拶



防衛大学校同窓会長 村川 豊

昨年4月に岩田前会長の後任として、防衛大学校同窓会長を拝命いたしました村川と申します。会員の皆様には、平素から同窓会活動に対し、ご理解とご支援をいただき、心からお礼申し上げます。

今後とも、「同窓会の役割は何よりも母校の充実・発展への寄与にある」という岩田前会長の方針を引き継ぐとともに、会員相互の親睦交流のため微力を尽くす所存ですので、よろしくお願いいたします。

さて、昨年は長期にわたるコロナ禍がようやく収束し、従来の日常が戻ってきたように感じています。私は、昨年11月の開校記念祭に参列させていただきましたが、15,000名を超える来場者が見守る中、記念式典・観閲行進及び棒倒し競技会等が整齊かつ勇壮に行われました。制約なしの開校記念祭開催は4年ぶりであり、コロナに悩まされた辛い経験を跳ね返すかのような学生諸君の熱気を肌で感じ、大変頼もしく思いました。

そして、本年3月には第68期生が岸田内閣総理大臣をはじめ多くの御来賓と参列者そして在校生からの祝福を受けて卒業し、4月には新たに第72期生が入校いたしました。コロナ禍を脱し、防大にもようやく本来の春が来たように感じております。

同窓会の近況について

防衛大学校同窓会は、第1期生を中心に昭和36年1月21日に設立され、昨年62年目を迎えました。これまで、諸先輩、各期の役員、歴代の事務局員、並びに期生会や地域支部等の皆様の献身的なご支援をいただき活動して参りました。

今や、会員数は2万6千名（現役約1万1,700名、OB1万4,000名、留学生450名）を超え、規模的には安定した組織となっております。

一方、第1期生会、第2期生会、第4期生会、昨年12月には航空第3期生会が組織的活動に終止符を打たれました。同窓会としては、一つの節目の時期を迎えているように思います。

令和6年度の事業計画につきましては、3月の代議員会において議決していただきましたが、その主な項目について紹介させていただきます。

まずは、これまで同様に学校側と意思疎通を図りつつ、母校の充実・発展に寄与して参ります。特に、現在、防大が積極的に取り組んでおられる国際交流事業等に対しては、今後とも積極的かつ柔軟に支援する予定です。

また、学生の部隊実習時には、各地域支部が中心となり各地において激励を実施したいと考えております。さらに、各地域支部の皆様におかれましては、これまで防大同窓会活動において大きな役割を果たしていただいておりますが、一層の活性化を図るため各地域支部の諸事業を推進いたします。

会員相互の交流につきましては、11月に予定される開校祭記念行事時にはホーム・ビジット・デー行事に第47期生が、令和7年3月の卒業式時のホーム・カミング・デー行事及び4月の入校式時のホーム・カ

ミング・デー2行事には、それぞれ第24期生及び第13期生が、学校長のお招きにより、懐かしい小原台で旧交を温められる予定です。同窓会は物心両面でこの素晴らしい行事を支援して参ります。

同窓会はなぜ必要？

防衛大学校同窓会は卒業生のすべてが会員となります。そして、会員が卒業時に納入する会費を次年度の活動経費とすることを基本としております。

しかしながら、近年、会費納入率が極端に低下しており、会務の運営にも支障を及ぼしております。これまで実施してきた活動をもとに、卒業生に対し同窓会活動の意義について理解を得る努力を重ねて参りましたが、目に見える成果は上がっておりません。同窓会としましては、卒業生諸君の意見も参考として、一層の会務の効率化や経費削減を図るとともに、会費の納入を従来の一括納入から在校中の積み立て方式に変える等、制度面の改善も図っております。

一方で、本件は単に予算の問題としてとらえるべきではないように感じています。卒業生等との対話を通じて、「同窓会とは何なのか?」「なぜ必要なのか?」をあらためて考える良い機会であるとも考えております。

「他の人も会費を払っているのだから」「今までやってきたことだから」では、若い人たちの理解は得られません。「母校の充実・発展のため、後輩のため」という明確な目的をぶらさずに説明し、目的に沿った活動をしていくことこそが理解を得る唯一の方法だと信じ、引き続き尽力して参ります。

戦後最も厳しく複雑な安全保障環境において国防の任に就く現役諸君はもちろん、将来の国防を担うリーダーを育成する防衛大学校の使命はますます大きなものとなっております。同窓会役員一同、久保学校長をはじめ防大職員の皆様、そして会員の皆様とますます連携を深め、母校の充実と発展のために尽力する所存です。皆様方からの一層のご支援ご協力をお願いし、挨拶とさせていただきます。

令和6年4月6日

防衛大学校同窓会長 村川 豊

【 村川 豊（むらかわ ゆたか） 略歴 】

25期、海上要員、国際関係論専攻、剣道部

昭和33年 神奈川県出身

平成21年 阪神基地隊司令

平成22年 海上自衛隊第4術科学学校長

平成23年 海上幕僚監部人事教育部長

平成25年 補給本部長

平成27年 海上幕僚副長

平成28年 海上幕僚長

平成31年 退官

現在、株式会社NTTデータ特別参与

◆学校長に聞く

防衛大学校長 久保文明



昨年度に引き続き、投稿する機会をいただき、心より御礼申し上げます。

日本社会全体の流れと歩調を合わせ、防衛大学校も令和5年5月連休明けから、コロナ対応においてはほぼ平常に復帰し、キャンパスにも明るさが戻ってきました。同年11月の開校記念祭はほぼコロナ禍以前と同様の形式で実施し、一般の方にも自由にご来校いただきました。日本社会全体の流れと歩調を合わせ、防衛大学校も令和5年5月連休明けから、コロナ対応においてはほぼ平常に復帰し、キャンパスにも明るさが戻ってきました。同年11月の開校記念祭はほぼコロナ禍以前と同様の形式で実施し、一般の方にも自由にご来校いただきました。

昨年度の『小原台だより』においては、防大で初めて中長期計画を策定したことを紹介させていただきました。自衛隊に中期防衛力整備計画はありましたが、防大にはそれに相当するものではありませんでした。そこで10年くらい先を見据えながら、同時に翌年度の予算要求の根拠にも使用できるように、中長期計画を作成しました。また、新しい課題は次から次へと生じますので、5年ごとでなく、毎年修正していくこととしました。こちらはかなり軌道に乗り、策定するプロセスも学内意見の聴取の仕方も含めて洗練され、また内容そのものも充実してきたのではないかと感じています。

昨年度ご報告したJICAでの校外研修ですが、令和5年度は、ジブチとフィリピンで2人ずつ実施することができました。どちらも夏季休暇中にまずJICA本部で約2週間研修し、その後現地に飛んでJICAプロジェクトの現場を約2週間視察させていただくという内容です。最後は再びJICA本部に戻り、すべての研修の成果を報告させていただきます。JICA職員の皆様には、ご多忙の中、防大生に特化した素晴らしい研修プログラムを作成・実施していただき、また研修中も丁寧なご対応をいただきました。心より感謝申し上げたいと思います。

しかも昨年のジブチの場合は、大塚海男大使のご厚意により大使館の視察が、そして自衛隊のご協力により現地の基地の視察も加わりました。防大生にとって、自分たちの先輩が大使をされている大使館と、自衛隊にとって海外で唯一の基地を訪問できたことも特筆すべきことであったと感じています。

もう一つ、こちらはジブチやフィリピンと比べると格段に近隣の出来事ではありますが、横須賀市教育委員会を通して走水小学校での運動会の手伝いに、こちらも校外研修として数名の学生が派遣されました。後日校長先生がわざわざお礼に来てくれましたが、仕事もきっちりこなした上、礼儀正しく、非の打ちどころがないとのお褒めの言葉をいただきました。小規模の校外研修ではありますが、異なった職場環境で異なった上司のもとで研修することは、生活や常識がとかく防大・自衛隊の世界に閉じこもりがちな防大生にとって、貴重な経験となるのではないかと期待しています。

私が令和3年4月に赴任した直後に、当時陸上自衛隊幕僚長であった吉田圭秀氏から、防大指導教官を若い時に努めた経験に基づく貴重なお話をいろいろ伺いました。その一つは、「今年の重大事件」を学生に書かせたらその前年の事件ばかりだったとのことでした。すなわち、防大生は新聞を読まず、ニュースを見ていないということになります。最近は学生舎の部屋単位で新聞をとることもほとんどないようです。何とかしたいと思案しているときに、日本経済新聞社からかなり大胆なアカデミック・プラン、すなわち防大生

割引プランを提示してもらいました。当初は日経新聞だけでしたが、私の方から英語学習にも使用できる Nikkei Asiaも付け加えたプランの作成を依頼しました。当然コストは若干増しましたが、調べてもらったところ、元来校内で多数の部課で購読していたため、そちらもオンラインに切り替えれば支出増はそれほどでもなく、何とか対応可能であるということになりました。この結果、現在、学生全員と必要とする事務区および希望する教員は、無料でオンライン購読が可能となりました。ここまで基礎条件を学校側が整えてあげても、実際に学生が日々紙面を、とくに英文記事も含めてどの程度読んでいるかは別問題です。しかし、教官によっては演習などで、英文記事を読んで報告させるようにして、学生を誘導してくれているようです。これもささやかな一歩ではありますが、学生が少しでも広い社会に関心をもつことに繋がっていけばと願っています。

学生舎生活でも若干の変化が起きています。

訓練部長の指導の下で、学生間指導において、徹底してパワーハラスメント的言動を排除しようとしています。例えばカッター競技の準備訓練においても、上級生は「そんなんじゃ駄目だ」といった否定的な言葉でなく、「よく頑張った」というような誉め言葉でもって応援するように変えているようです。一昨年に、伝統の(?)乾布摩擦を止めました。ご異論があるかもしれませんが。ただ、学生に聞くと、元に戻さないで欲しいという強い答えが返ってきます。

昨年度は、卒業式に任官辞退者も出席させました。むろん、任官してもらえないことは残念ですが、卒業要件を完全かつ立派に満たしている以上、任命宣誓式は別として、他の学生と同等に扱うべきと思いました。関係局長・課長あるいは副校長も皆同意見であったと記憶しています。

ここでは詳細を省略しますが、現在試行中のものもあります。小さな改革であっても、担当の自衛官は、これを変えると先輩方からお叱りを受けるのではないかと等々、かなり神経質になるようです。いろいろご意見をぜひいただければ幸甚ですが、同時に現場での試みを暖かく見守っていただければ幸いです。

令和6年度入試(令和5年度に施行。6年4月入校者用)においては、一部において、志願者減を食い止めることができました。理由の一部は、地方協力本部のご協力を得て、推薦入試の面接会場を全国に展開したことかと思われます。さらに近年は防大自身、自前の入試予算を獲得して、地本から呼ばれなくてもこちらから教官・事務官を地方に派遣するプッシュ型の説明会を多数開催しています。

ただし、より多くの志願者を獲得するためには、単に入試における工夫だけでは不十分であり、防大全般の魅力化の努力と一体とならなければならないと感じています。まさに、海外留学制度や校外研修制度の拡充、あるいは学生舎生活や学生間関係の改善などについて、本稿で触れてきた所以であります。

最近、真殿知彦海上幕僚副長が書かれた『海軍兵学校長のことば』(三和書籍、2023年)を読んでいたところ、谷口尚真学校長の次のような言葉に出会いました。「海軍の消長は数にあらずして質にあり、物にあらずして人にあり。而してその人を作るは実に兵学校の使命なり。」これは海軍を自衛隊と、兵学校を防大に言い換えますと、完全に今日にも当てはまる文章であると確信します。

歩みは遅々たるものではありませんが、防大がより魅力的な学校となるように引き続き努力を続けていく所存です。今後ともご助言をいただければ幸いです。

◆防衛大学校関連

◇副校長に聞く

「将来有為な学生を育成するために」

陸将 荒井 正芳（34期・陸上）



はじめに

同窓会の皆様には平素より防衛大学校に対する各種ご支援・ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。昨年3月末に第3代副校長（自衛官）として着任しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。寄稿の機会をいただきましたので、コロナ禍明けの防大の現状のご報告と将来有為な学生育成のための取組みの一端につき紹介したいと思います。

コロナ禍明けの防大の現状

昨年5月の新型コロナウイルス感染症に係る各種制約の解除以降、ここ防大においても徐々にコロナ禍前のような学科・訓練、学生舎生活及び校友会活動を取り戻してきました。在校生（当時：68～71期）の2学年以上は本校入校以来、1学年は入校前の高校時代にコロナ禍の影響をもろに受けています。そのような学生たちですが、ある学生の弁を借りると「何か目の前の霧が晴れたよう」に感じているのか、5月以降は校内には明るさと活気に溢れ、失われた時間を取り戻すかのごとく躍動しているように見えます。主要行事の夏季（全学年）及び秋季（1学年）定期訓練はじめ、9月の水泳競技会、11月の第71回開校記念祭も約3～4年ぶりに各種制約なしで実施することができました。他方、約3年超に及ぶコロナ禍の制約の影響は小さくなく、職員側の校務運営や学生の諸活動については一部手探りで進めている面があることも事実です。

将来有為な学生を育成するために

防大の発展や将来有為な人材となるべき学生の育成は、さまざまな側面から考えなければなりません。その基軸は、防大創設の目的（将来幹部自衛官となるべき者の教育訓練）、教育訓練の方針（広い視野、科学的思考力、豊かな人間性の養成・涵養）に基づくこと及び建学の精神・学生綱領などの伝統の革新にあることは当然であり、大前提となります。

ここでは、これらに加えて、着任後に感じている学生の気質、主に良いと思われる気質に着目し、留意している施策や今後の方向性について述べたいと思います。

まず学生の対外志向性です。現在コロナ禍が明け、防大においても国際交流がより一層活発化しています。次の数字は年度により若干の振れ幅はありますが、研究科学生を含め10カ国約100名前後の外国人留学生を常続的に受入れている一方、本科学生は約50から60名が海外の士官学校や国際会議に派遣されていま

す。私が在校していた約30年前と比較しても大幅な数的増大であり、学生にとって国際化は身近で自然なものになっています。国内の交流では、一般大学という就職活動と連動したインターンシップ活動、防大ではその趣旨では活動できませんので、対外的な視野を広げるという観点からの活動を校外研修として昨年度から実施しています。JICA研修派遣（国内本部及び海外事務所）と地域の部外公的機関での社会活動支援への派遣の試みです。これら国外・国内の交流施策の展開と拡充は、学校として施策化する部分もありますが、海外派遣や学外研修の機会に高い関心を示し、強く要望する学生が多いことにもよります。派遣された学生の所見を見聞きすると、国内外を問わず派遣前と派遣後では明らかに成長の跡が見て取れます。海外派遣では派遣先の魅力を感じるのは当然のことですが、翻って我が国の社会的・文化的な魅力、自国の安全保障・国防の重要性、防大の良さなどをあらためて強く感じて帰って来ます。また、国内研修においても地域社会に支えられていることや、異なる職場で働く人々の考えや思いに触れ、あらためて自らを見直す機会を得て帰って来ます。我々の世代以上に今の学生が持つ対外的な関心から、自らの視野を広げるための施策を充実させることは、将来にわたり激動の国際社会を生き抜く幹部自衛官・リーダーとしての素地を培うのに有益であり、今後とも量的・質的な拡充を進めていきたいと思っています。このため、防大の担当部署の組織・機構の見直しを図る必要がありますし、同窓会の皆様のご助言・ご支援なども賜れば幸いです。

次に学生のキャリア意識の高さという気質です。自分が進む、選択する職業・組織は自らの人生を賭けるにふさわしいか否かということへの関心は極めて高いと感じます。これらは一般社会の若者・大学生などに共通的にもいわれており、同世代の防大生も同じメンタリティーであるとは思いますが、他方、防大では一般社会・大学のように数ある職業・進路選択の際の比較論としてのキャリア教育・支援ではなく、安全保障・国防の重要性などを理解させた上で、幹部自衛官として進ませるためのキャリア教育・支援を実施しなければなりません。このため、防大の三本柱教育（学科・訓練、学生舎生活、校友会活動）を通じ、幹部自衛官である指導教官や学科教官などによるきめ細やかな教育が極めて重要になります。特に定期訓練以外の通常の訓練（主に週2時間）や防衛学教育の中でのキャリア教育の充実、学生舎生活における臨機の機会教育、学生教育のために来校する幹部自衛官に経歴・勤務体験談を含めて貰うことなどに留意しています。防大職員の努力は当然ですが、定期訓練の部隊実習、あるいは校友会活動などで学生と接する同窓会の皆様にも今まで以上に、自衛官勤務のご経験談・やりがいを含め、学生へのご助言・激励をいただければ、より多層的・複合的な観点から学生のキャリア意識の高揚、ひいては強固な任官意欲の向上に資すると思われまますのでご理解・ご助力賜れば幸いです。

おわりに

以上、着任後に感じた学生の良い気質に着目した学生育成の取組みの一端について紹介しました。当然、学生教育には他のさまざまな取組みもありますし、学生気質については、ここに挙げた以外の部分の影響・課題とその対応などにも十分注意しなければなりません。

いずれにしても、防大の発展や学生教育については、コロナ禍明けのここ2年から3年が、伝統を守りつつ時代の要請に適応した取組みの道筋を付ける勝負の時期と考えております。我が国の国防を担う幹部自衛官となるべき者の育成について精一杯の努力と情報発信などに努めて参りますので、引き続きご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

◇令和５年度カッター競技会について

令和５年４月２５日（火）、令和５年度カッター競技会が走水海上訓練場沖で実施されました。

昨年度は入校式の延期により実施が約１か月延期されましたが、今年度は予定どおりに開催することができ、同窓会からは佐藤副会長が参加いたしました。

競技は各大隊４個クルー、合計１６個クルーが参加し、各大隊のクルーが獲得した点数の合計で競う「大隊対抗の部」と、クルーごとのタイムで競う「クルー対抗の部」の２つがあります。

防大の走水海上訓練場沖に設定されたコースは、回頭ブイを折り返す距離２,０００ｍのコースで、１回のレースは４艇で実施されます。



このような予選の中、決勝レースに参加できたのは、第２大隊１個クルー、第３大隊１個クルー、そして第４大隊の２個クルーで、残念ながら第１大隊のクルーは決勝に残ることはできませんでした。

なお、決勝レースに参加するクルーは、予選レースと同じクルー構成で参加することはできません。競技への全員参加を目指すため、クルーを構成する１６名（艇指揮１名、艇長１名、漕手１２名、予備員２名）の内、最低でも７名を交代させなければならないのです。予選と決勝のクルー構成をどのようにするかは、各大隊の思案のしどころです。

決勝レースは午後に行われ、午前中に吹いていた北風も止み、海面も穏やかで絶好のコンディションとなりました。

空撮用のドローンが飛び回る中、決勝レースが開始され、走水観音崎ボードウォークに集まったご家族からの熱い声援を受けながら各クルーは必死に漕ぎましたが、最後に決勝レースを制したのは、第２大隊のクルーでした。

競技会の結果は次のとおりです。

順位	大隊対抗の部	クルー対抗の部
優勝	第４大隊（４４６点）	第２３クルー（１１分４７秒）
第２位	第３大隊（４３６点）	第４２クルー（１２分０３秒）
第３位	第２大隊（３５６点）	第３４クルー（１２分１９秒）
第４位	第１大隊（１４０点）	



優勝大隊の代表に優勝旗を授与する久保学校長



優勝クルーの代表にメダルを授与する佐藤副会長



スタート位置まで曳航される各艇



スタート！



折り返しでの回頭



ご家族の声援を受けての必死のとう漕



歓喜する優勝クルー

なお、クルー対抗の部で優勝した第23クルーのタイムは、記録が残る平成14年以降で最速でした。

表彰式は記念講堂で行われました。

大隊対抗の部では、久保学校長から優勝大隊である第4大隊に対して、表彰状、優勝旗、そして学生舎玄関に掲げられる「カッター競技会優勝大隊」の看板が授与されました。

クルー対抗の部では、優勝から第3位のクルーに対して、久保学校長から表彰状が授与され、佐藤副会長からはメダルが授与されました。

なお、表彰式の中で、授与されたメダルは防衛大学校同窓会から寄贈された旨のアナウンスがありました。

最後に久保学校長が訓示され、令和5年度のカッター競技会は無事に終了しました。

(31期海 伊藤辰彦 記)

◇令和5年度水泳競技会の観戦及び激励

令和5年9月5日（火）、令和5年度防大水泳競技会が開催され、同窓会を代表して小林副会長が激励に訪れました。当日は、快晴で絶好の競技会日和となり、大隊旗が風にはためく中、選手一人ひとりの力強い泳ぎと各大隊の活気溢れる応援で大会は大いに盛り上がりました。



視察席等の状況



観戦中の小林副会長



制限が解除された応援



白熱の水球競技



個人競技の様子

今年度は、コロナ感染防止のための制限も解除され、プールサイドでは熱のこもった応援が展開され、競技では、50mバタフライ及び50m背泳ぎを廃止し、200mライフセービングリレー、中隊対抗メドレーリレーの新たなリレー種目を追加する等、大隊対抗戦をより盛り上げる工夫が凝らされ、また、コロナの感染

拡大や屋内プール修繕のため実施できていなかった水球競技も4年振りに復活し白熱した試合が繰り広げられる等、学生が主体となって企画運営し、「伝統の継承と進化」の調和を図りながら競技会を盛り上げていました。



競技半ばから第2大隊がリード



リレー競技の様子

競技結果は、第2大隊が見事に2連覇を成し遂げ、また、5種目（中隊対抗平泳ぎリレー、中隊対抗自由形リレー、1学年400m平泳ぎリレー、400m平泳ぎリレー、400m自由形リレー）で大会記録が更新されました。



記念講堂での表彰式

表彰式は、記念講堂において全学生・職員が参加して行われ、久保学校長（競技会会長）からの賞状と優勝旗の授与に引き続き、小林副会長から同窓会寄贈のメダルが受賞者に贈呈されました。また、学生に対して激励の機会をいただき、小林副会長が

「同窓会は母校の充実・発展のために皆さんの様々な活動を支援しています。卒業後は皆さんも同窓会の一員になるので是非一緒に活動して頂ければと思います。優勝された皆さん、おめでとうございます。これは選手一人一人を何処に当てるかという作戦と一人一人の力の結晶であり、素晴らしい成果であったと思います。これから後期に入り、開校祭等の様々な行事が計画されていますが、コロナの影響を受けない形で迎え

られることを素晴らしく、嬉しく思います。同窓会一同、皆さんの今後の益々の活躍と充実発展を祈念していますので、頑張ってください。」
と学生を激励しました。



小林副会長からのメダル贈呈



小林副会長からの激励

(総務部 31期 空 津田昌隆 記)

◇令和5年度同窓生等著作図書の贈呈

令和5年度同窓会事業計画に基づき、同窓生の皆様にご推薦を頂いた同窓生等著作のうちから現役学生が希望した32冊を贈呈いたしました。

贈呈は12月20日（水）、全校学生が集まる記念講堂において、同窓会小原台事務局長 久保田空将補から各中隊学生長に対して手渡されました。この際、小原台事務局長から「各中隊に寄贈された図書を読むことを通じて、皆さんの学びの一助にしてほしい。」とのお話とともに本事業の紹介がありました。また、司会から各中隊への贈呈図書のタイトル紹介があった際には、歓声上がるなど、大変盛り上がった贈呈となりました。

本事業が学生の皆さんの支援となり、喜んでいただければ同窓会としても大変うれしく思います。



小原台事務局長からの贈呈



図書を手にした各中隊の学生代表



寄贈された同窓生等著作の図書

寄贈図書一覧

著 作	著者等(敬称略)
ソ連軍グリラを殲滅せよーミグ25事件で防衛出動した自衛隊員たちの決死の行動	大貫悦司
「コントレイル」ーFSXとは何だったのかー	山田秀次郎
制限戦争指導論	中村好寿(翻訳)
ウクライナ戦争と激変する国際秩序	森本 敏
次期戦闘機開発をいかに成功させるか	森本敏 岩崎茂 山崎剛美
台湾有事のシナリオ	樋口譲次 小野田治 矢野一樹 小川清史
戦術の本質 完成版	木元寛明
「陸軍中野学校」の教え	福山隆
システム分析入門	齊藤芳正
ロシアの情報兵器としての反射統制の理論	鬼塚隆志(監修) 壁村正照(翻訳)
リーダー3つの条件	河野克俊
陸・海・空 究極のブリーフィング	小野田治 伊藤俊幸 小川清史
自衛隊最高幹部が語る台湾有事	岩田清文 武居智久 尾上定正
逆風に向かう社員になれ	宮原博昭
ワーママが無理ゲーすぎてメンタルがやばいのでカウンセラーの先生に聞いてみた	下園壮太
「死にたい」気持ちに寄り添うーまずやるべきこととはいけないことー	下園壮太
超一流諜報員の頭の回転が速くなるダークスキル	上田篤盛

◇令和5年度防衛学特論研究レポート発表会

令和5年度防衛学特論研究レポート発表会が、防衛大学校において令和5年12月21日（木）1010～1620の間実施され、3名の理事（中西理事、山田理事、上尾理事）が校外来賓者として参加しました。

防大同窓会は、平成24年から、学術向上に寄与するため、学生の意欲向上を狙いとして「統率」「国防」「戦史」「戦略」「軍事と科学技術」の5部門における褒賞（副賞）支援を行っています。

発表会では、陸・海・空の要員に分かれ、優秀レポートに選ばれた陸11名、海6名、空6名(留学生各1名を含む)が、第4学年（68期）及び第3学年（69期）等を前に発表を行い、研究レポート作成を通じた論理的思考力、発表・討議等を通じた説明伝達力及び論旨展開力等向上の成果を如何なく発揮していました。

表彰は、全員が集合したのち、記念講堂において行われ、教官による講評の後、中西理事が激励の言葉を述べました。



記念講堂における発表風景



表彰式の様子



受賞者の晴れ晴れとした勇姿

（総務部担当補佐32期 陸 小谷琢磨 記）

◇留学卒業生祝賀行事 7か国18名の卒業を祝う

3月6日（水）、防衛大学校校内において、留学生卒業祝賀行事が執り行われました。祝賀行事は、徽章授与式と懇親会の2部構成で行われ、第68期卒業留学生7か国18名※のほか、卒業留学生担当協力家庭（ホストファミリー）23名、関係大使館武官、協力家庭会及び学校関係者など約90名が参列しました。防大同窓会が留学生卒業祝賀行事に参加するのは今回で2回目となります。

※タイ5名、インドネシア3名、ヴェトナム3名、カンボジア2名、フィリピン2名、モンゴル2名、ラオス1名

懇親会に先立ち、徽章授与式が執り行われ、久保学校長が卒業留学生一人一人に徽章を授与され、最後に参列者と共に記念撮影が行われました。

懇親会は、今年から防大主催で開催（前回までは協力家庭会が主催）されることになり、協力家庭会の協力、進行のもと終始和やかな雰囲気で行われました。学校長及び協力家庭会会長の挨拶に引き続き、村川防大同窓会会長が、卒業生へのお祝い、協力家庭への謝辞とともに、それぞれの国に帰国しても防大同窓生との絆を大切に、世界平和のために尽力してもらいたい旨、祝辞を述べられました。懇談では、在校留学生からのビ



卒業留学生に徽章を授与する久保学校長



卒業留学生と参列者(協力家庭(ホストファミリー))との記念撮影



卒業留学生に祝辞を述べる村川同窓会会長



卒業留学生全員での学生歌斉唱

デオメッセージの紹介で会も盛り上がり、その後、卒業留学生一人ずつからのお礼の言葉と協力家庭への花束贈呈が行われ、涙が見られる場面もありました。最後に、卒業留学生全員による学生歌斉唱で会は締めくくられました。

卒業留学生は、18名のうち14名は帰国してそれぞれの国の軍で初級士官として任務に就くほか、4名は引き続き日本に残り、海自幹部候補生学校（2名）、空自幹部候補生学校（1名）及び防大研究科（1名）に進学する予定です。

（32期陸 川村 浩和 記）

◇令和5年度断郊競技会の激励

令和5年度断郊競技会（69期）及び持続走競技会（68期）が、防衛大学校において令和6年3月6日（水）、断郊競技会は午前中、持続走競技会は午後にかけて実施され、丸茂副会長が午前中の断郊競技会に校外来賓者として参加しました。

今年度も昨年度に引き続き校外コースを取り入れ、観音崎灯台をスタートとしてゴールの陸上競技場まで約7kmのコースを約10kgの背嚢を背負った7から11名による各分隊が気合も十二分に力走を繰り広げていました。当日はあいにくの寒く雨交じりの悪天候での開催となりましたが、雨、風を吹き飛ばすような熱戦となりました。

各分隊は、早い分隊で36分、遅い分隊では50分以上かかることもありましたが、男女問わず、疲れたメンバーの背嚢を背負う場面や肩を抱えて走る光景も見られ、競技会を通じて同期間の団結心が脈々と培われていることを確認いたしました。

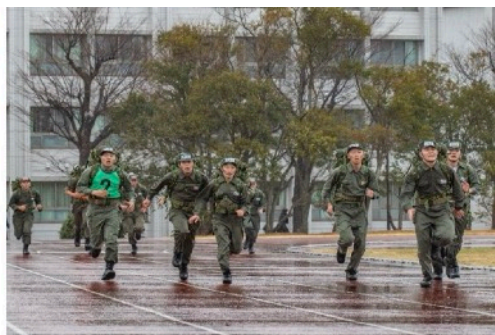
なお、閉会式は14日（木）に実施され、小原台事務局長からメダル授与となりました。ゴール後の各学生の全力を出し切った若々しい姿に頼もしさを感じ、実りの多い競技会であったと感じました。

断郊競技会結果は以下のとおりです。

- 大隊対抗
優 勝：第4大隊（平均：48 分 25 秒）
準優勝：第2大隊（平均：48 分 30 秒）
- 分隊対抗
第1位：第2大隊第1分隊（36 分 00 秒）
第2位：第4大隊第1分隊（37 分 19 秒）
第3位：第2大隊第2分隊（37 分 52 秒）



スタート地点で号砲を鳴らす久保学校長



力走する学生



観音崎地区を力強く登る分隊



声援を送る久保学校長と丸茂副会長



背中をひと押しする同期生の走り



分隊揃ってのゴール

(総務部 32期 空 川波清明 記)

◆同窓生は今

◇第67期生に聞く

「防衛大学校での生活を振り返って、後輩たちに伝えたいこと」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第3候補生隊第4区隊

一般幹部候補生 陸曹長 嶋田 透哉



私は現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第104期BU課程に入校中の防衛大学校本科第67期卒業生、嶋田候補生です。

3月に防衛大学校を卒業し、福岡県久留米市にある幹部候補生学校に入校してから早くも5か月が経ちました。初級幹部として必要な資質と識能を涵養するため勉学、訓練等に励んできたこの5か月間は、非常に忙しい日々でありました。しかし同時に、その生活を通して自分自身が心身両面において成長していることを実感しており、また、頼れる同期達と共に切磋琢磨しながら共通の目標に向けて努力できていることに対し、充実感も感じています。入校前には果たして自分は幹部候補生学校でしっかりとやっていけるのかといった不安もありました。しかし、いざ入校してみると、候補生のことを親身になって指導して下さる教官の方々や、濃密且つ効率的なカリキュラムと環境のおかげで、そのような不安はいつの間にか払拭されていました。おそらく今防衛大学校にいる後輩の中には、私がそうだったのと同じように、幹部候補生学校への入校に対して何らかの不安を感じている人が多いのではないのでしょうか。私もまだ至らない所ばかりの候補生ではありますが、その不安を少しでも和らげ、入校に向けて今何をすべきか考える上での一助としてもらうために、私の経験と反省を踏まえて以下の3点を伝えたいと思います。

まず、当たり前のことではありますが、防衛大学校での生活には間違いなく意味があるということです。しかし中には、防衛大学校での教育に対して「このままでいいのか」と疑問や不安を抱いている人も少なからずいるのではないかと思います。先ほど私は幹部候補生学校の教官の方々や環境に助けられ、入校前の不安を払拭することができたと述べましたが、それらと同等かそれ以上に、防衛大学校で得た学びは私を強く支えてくれました。例を挙げると、学生間指導を通して得た他人のことを理解しようとする力、学生舎運営や校友会活動を通して得たリーダーシップの基礎、あるいは時間的にも精神的にも余裕がない状況下で冷静に行動する能力などは、間違いなく防衛大学校での生活を通して得たものであります。私も恥ずかしながら、幹部候補生学校に入校してしばらくしてから初めて、防衛大学校の生活を通してこれだけ多くのものを学ぶことができていたのだと気付かされました。ずっとその環境の中にいると気付かないかもしれませんが、防衛大学校はそれだけ多くのものを日々の生活を通して学べる環境が整っている場所です。そのことに自信をもって一日一日を過ごしていくことで、卒業する時には卒業後も通用する多くのものを身につけられていると思います。

次に、目的意識をもって生活するということです。先ほど述べたように、防衛大学校には自分を大きく成長させる環境が整っています。しかしながら、何も考えずただその日その日を過ごしてしまうと、なんの学

びも得られないまま卒業してしまうということが起こり得ます。そうならないために重要なのが、常に目的意識を持つということです。自分が何のために防衛大学校で生活しているのか、どのような幹部自衛官になりたいのか、常に考え続けることです。そうすることにより、日々の生活の中に学びが生まれ、経験に意味が生まれます。また、目的を定めると目標が定まり、目標が定まるとそれと今の自分を比較するようになり、それは自分を客観的に見ることに繋がります。結果として自分がどういう人間なのか考える時間も増え、これも私が防衛大学校で得られたと思う要素の一つです。自分と向き合い、自分という人間について理解を深められたことは、幹部として必要な資質を涵養するうえで大きな利点となります。

最後に、今を楽しむということです。単に遊んでいればいいということではありませんが、防衛大学校での4年間ほど時間と機会に恵まれた期間は先のほとんどありません。また、修養の場であると同時に、二度とない学生時代でもあります。その貴重な4年間の中で、様々なことにチャレンジして多くの失敗を経験したり、幹部自衛官という枠に囚われずに幅広い分野の勉強をしたり、校友会活動に一生懸命に取り組んだり、4年間で余すところなく充実させてもらいたいのです。そうして、その時々目の前にあることに対して全力で取り組んでいれば、後悔は残らず、自己の充実にも繋がります。加えて、今周りにいる同期達との時間を大切にすることも重要です。陸上要員の同期とは幹部候補生学校でまた共に頑張ることになりますが、海上、航空要員の同期とは今後会う機会は中々ありません。だからこそ、同期を大切に、将来にまでつながるような人間関係を築いてほしいです。

これまで述べてきたことは、私が幹部候補生学校に入校して初めて気付いたことや、もっとこうしていれば良かったとの反省から後輩の皆さんに伝えたいと思ったことです。もし皆さんがこれを読んで幹部候補生学校に対する不安が少しでも減ったのなら幸いです。一日一日を大切に、楽しみながら、目の前のことに一生懸命取り組んでいて下さい。そうすれば、防衛大学校での生活は必ず何かをもたらしてくれます。私も、皆さんに負けないよう、幹部候補生学校での残りの教育に全力で臨んでいきます。同じ目標に向かう者同士、お互いに頑張っていきましょう。またどこかで皆さんと一緒に勤務できることを楽しみにしています。

「幹部候補生学校に入校してみて」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第4候補生隊第5区隊

一般幹部候補生 陸曹長 八木 奎都



皆さんこんにちは。防衛大学校本科第67期卒業生、第3大隊、機械システム工学科、フェンシング部、八木奎都です。

防大生の皆さんは様々な行事が終わり、第4学年は、幹部候補生学校入校が近づき、少しずつ不安が増えてくる頃だと思います。今回は、陸上自衛隊幹部候補生学校に入校して5か月経った私が防大生の皆さんに対して幹部候補生学校での生活や雰囲気伝え、皆さんの不安が少しでも解消されればと思っています。

防大生の皆さんは、幹部候補生学校に対してどのようなイメージを持っていますでしょうか。去年の私は、幹部候補生学校入校が近づくにつれて、「行きたくない。」と強く思っていました。このように思っていた理由は、幹部候補生学校で自分がついていけるのかわからなく不安と恐怖があったから、任官して自衛官として続けていくことに自信が持てなかったからだと思います。しかし入校して5か月経った今、私が幹部候補生学校での生活に思っていることを一言で表すとすれば「おもしろい」です。これだけ聞いてもあまりわからないと思います。私がこのように思うのは、防大での生活に比べて幹部候補生学校での生活は自分の成長を実感する場面が多く、充実感や達成感を得ることができるからです。

私自身のことを振り返ると、防大では部屋から始まり学生隊まで大きな組織で生活し、自分の学科や訓練のこともやりつつ、部屋長や週番、学生舎運営など上下級生のことを考えて悩み、自分以外のことにも多く時間を割いていた記憶があります。対して幹部候補生学校では、防大と違って他の学年の人も、学科や要員区分分ありません。陸上自衛隊の幹部自衛官になるという同じ方向を向いた同期しかいません。周りも自分と同じ方向を向いているので、各種検定や訓練といった目標に向けて全力で取り組める環境があります。たくさん考え、練成して、自分に多くの時間を割き、常に自分と向き合えるので様々な場面で自分の成長を実感することができます。辛いと思うことよりもそれ以上に得られるものが多くあるので充実感を感じます。

私のように入校に対して不安や恐怖を抱えている人はいると思います。ですが防大4年間を過ごしてきた皆さんなら大丈夫です。私たちが防大4年間を通して行ってきたことは、幹部候補生学校に来て必ず何かの役に立ちます。

また、自衛官として続けていく事に自信が持てない人も心配はいりません。防大4年間を過ごしてきた皆さんなら大丈夫です。私自身、防大受験は滑り止め、陸上要員は第3希望、特に志もなく、やりたいこともなかったのが幹部候補生学校に来ました。入校当初は、続けていけるのかも分からないし、本当に任官してよかったのか悩むことも多々ありました。しかし、幹部候補生学校での生活を続けていく中で、各種カリキュラムを通じて自分の成長を実感することで自信につながっていきます。

私が今伝えたいことは2つあります。

1つは、防大での生活を無駄にしないでほしいということです。先ほども言った通り、防大での学生舎生活や体力練成、訓練は幹部候補生学校でも役に立ちます。完璧じゃなくても大丈夫です。1つ1つ、目の前のことに真剣に向き合ってください。また防大での人との繋がりは、防大を卒業した後でも感じる場面が多々あります。周りの上下級生、同期との時間を大切にしてください。

もう1つは、とりあえず幹部候補生学校に来てほしいということです。たくさん不安要素があるのはわかります。何度も言っていますが、防大4年間を過ごしてきた皆さんなら大丈夫です。防大入学時を思い出してください。様々な思いを抱えて入学して、気が付いたら一丁前に防大生になっていたと思います。幹部候補生学校も同じです。気が付いたら高良山登山走、野営訓練等、あっという間に日々が過ぎていきます。皆さんも立派な候補生になれます。

たくさん書いてきましたが、皆さんの不安は少しでも解消されたでしょうか。私もあと5カ月、幹部自衛官になれるよう生活していきます。皆さんも後悔のない防大生活を過ごしてください。

「後輩に伝えたいこと」

海上自衛隊幹部候補生学校

第74期一般幹部候補生課程 第3分隊

一般幹部候補生 海曹長 堂本 貴弘



海上自衛隊幹部候補生学校 第74期一般幹部候補生課程（Ⅰ課程）の堂本候補生です。この度、防衛大学校 第67期本科学士の卒業生を代表し、「小原台だより」に寄稿する機会を頂きましたので、「後輩に伝えたいこと」と題し、私が感じたことを綴ろうと思います。

私が、候校に入校して早半年が経ちました。候校における生活を日々過ごしていく中で、多くの同期たちと目指すべき人生設計やあるべき人徳について会話を交わしてきました。中には、自身の目指すべき道が私たちとは違うと考え、以前とは違う将来に向かって挑戦していった者たちもいました。そんな中で私が感じた海上自衛隊幹部候補生学校という教育機関と私たちについて後輩にあたる皆様に伝えておきたいことを3点に綴ろうと思います。

1つ目は、防衛大学校在学時に想像していた本校と私が生活していく中で実感した本校に対するイメージの齟齬についてです。私が防衛大学校在学時に想像していた本校に対するイメージを平易な言葉で言い換えれば、「またもう1年間、1年生に戻るのか」でした。このイメージは全くもって間違えていたというわけではありませんでしたが、いくつか違っていた点はあるように考えます。その主たるところは日々の生活の中の一つ一つの行為に意味を見出す努力とその価値という点です。本校に入校するとほぼ毎日ある服装容儀点検、分隊点検、短艇競技、8マイル遠泳（8時間弱）及び起床と同時にかかる総短艇訓練など厳しい訓練が待っています。さらに疲れた身体に休ませる暇を与えずに厳しい指導が追い打ちをかけてきます。これだけ見ればイメージどおりだと思います。しかし、私が伝えたいのはそれぞれの訓練や教官との問答は決して無駄ではないということです。訓練一つ一つには目的があり、妥協すれば得られるものはもちろんありません。逆説的に言えば、努力をすればするだけ、同期との絆の醸成、部隊の指揮、統率法の理解並びに部下を率いるリーダー像の確立等々が得られます。もちろん、きついことを妥協せずにやるには根気が必要ではありますが、その先にある価値に気づくことができれば本校の良さがわかると思います。

2つ目は、同期の大切さについてです。同期の大切さについては防衛大学校でも教わり続けると思いますが、本校においてはそれ以上に同期との協力を求められます。海上自衛隊には同じ期別であっても序列があるという噂を耳にしたことがあると思いますが、実際にそういった人事評価は存在すると私たちも聞いています。ゆえに、利己的な方向に意識が向いてしまうと思われます。しかし、本校においてはこの序列のためではなく利他の精神を求められます。他人の役に立つに

は自分ができて当たり前でなければなりません。したがって、1人の力ではどうにもできないことを同期と協力し、乗り越えていく修練の場であると理解しています。今そこにいる同期を大切に、新たに出会う同期と切磋琢磨して欲しいと切に願います。苦しいときには必ず同期が支えてくれます。だからこそ、同期が苦しいときに支えてあげられるように同期を大切にしたいと思います。

3つ目は、海上自衛隊幹部候補生学校は修練の場であるということについてです。そんなこと聞かずともわかると思いますが、あえて伝えたいです。正直、生半可な覚悟だと妥協して易きに流れるばかりで1年間を無駄にすることは間違いありません。人間だから疲れることはあります。でも、人生の糧になる機会を見失わないように高みを目指し続けてほしいです。だからこそ、この1年間が皆様の価値に、人生の糧になるよう、自己の修練に努めてほしいと切に願います。

長々と伝えてきましたが、後輩にあたる皆様はもっと新たな発見や気づきがあると思います。私が「後輩に伝えたいこと」と題して綴ってきたこの言葉が皆様のためになれば幸いです。



やっぱりカレーが一番

「防衛大学校と航空自衛隊幹部候補生学校の違い」

航空自衛隊幹部候補生学校

学生隊

一般幹部候補生 空曹長 八尋 翼



1 はじめに

はじめまして。私は今年度4月から奈良県に所在する航空自衛隊幹部候補生学校（以下「空幹候校」という。）に入校している八尋候補生（防大67期）です。空幹候校は、航空自衛隊の幹部自衛官となる者を育成する機関であり、「自ら考え判断し行動する航空自衛隊幹部」を教育理念とし、日々の教育訓練が行われています。現在、私が本校に入校してから早や4ヵ月が経過しました。当初は防衛大学校との違いから戸惑うことも少なくありませんでしたが、今では空幹候校での生活にも慣れ、充実した日々を過ごしています。一方で、空幹候校での生活に慣れた現在においても、防衛大学校と空幹候校の違いを感じることは多くあります。そこで、今回はこの2校の違いについて紹介したいと思います。

2 防衛大学校と空幹候校の違い

まず1つ目の違いについては、共に生活する同期の多様性です。防衛大学校は、入校に際して年齢制限があり、共に入校し、そして卒業した同期は自分と同じように、つい最近、高校を卒業した人が殆どでした。一方で、空幹候校はこれとは大きく異なります。まず、私のように防衛大学校を卒業した後に空幹候校に入校した学生は、一般大学から入校した学生と合わせて、BU（防大及び一般）課程学生と呼称されます。しかし、学生舎において寝食を共にする同期はこれだけではありません。例えば、数年間、部隊で空曹として勤務した後に入校するI（部内）課程学生、防衛医科大学校等で医学を学んだ後に入校するMDN（医科歯科看護科）課程学生、航空学生としてウィングマークを取得した後に入校するA（飛行）課程学生及び准尉又は曹長から選抜されて任官するS（3尉候補者）課程学生など、様々な課程学生と共に生活していくこととなります。そして、このように出身ソースや年齢などが異なる同期との生活では、様々な知見を深めることができます。例えば、I課程学生からは、彼らが今まで空曹として初級幹部と関わってきた中で、どのような初級幹部が必要とされているかを知ることができ、同じBU課程学生の中でも一般大学を卒業して入校した学生からは、自衛隊の枠に囚われない柔軟な考え方に触れることができました。これらの経験というのは、決して防衛大学校の同期からは得られないものであり、空幹候校の有意義な点の一つであると思います。

3 防衛大学校と空幹候校の違い

続いて2つ目は、2校の教育目的の違いです。まず防衛大学校の教育目的は、将来自衛隊の幹部自衛官として必要な識見及び能力並びに伸展性のある資質を与えることにあります。一方で、空幹候校は、はじめに述べたとおり、自ら考え判断し行動する航空自衛隊幹部を育成することを目的としています。そして、この違いは日々の教育訓練に色濃く表れています。例えば、防衛大学校での訓練では教官から教わったことを正確に覚えることが要求されます。一方で空幹候校では、教育目的を達成するため、より高度なレベルが要求されます。例えば、大規模な訓練では、訓練想定に応じた部隊の活動計画を学生自らが考え、その計画に基づき実行に移すことが要求されます。また、訓練の途中で様々な状況が付与され、自ら考え判断し行動する

ことも求められます。この他にも、空幹候校では、幹部自衛官としての立ち居振る舞いを身に付けることを主眼として、毎日朝礼が行われますが、これを企画し実行するまで、すべてを学生が自ら考えて行っています。時期的特性等を踏まえ、どのような朝礼が学生の資質の向上に繋がるのかを考え、実施要領を作成し、実行段階においては監督指導を行う。このような活動が、空幹候校では毎日行われています。

4 おわりに

これまで防衛大学校と空幹候校の違いについて説明してきましたが、もちろん両校は似ている点も多くあります。例えば、防衛大学校では大隊対抗で棒倒しをはじめとする様々な競技会が行われますが、空幹候校でも中隊又は区隊対抗で格技、球技、駅伝及び断郊等の競技会が行われています。さすがに規模は防衛大学校の方が大きいですが、競技会に臨む学生の熱量は空幹候校も負けず劣らずです。また、課業後や休日の過ごし方もほぼ同じです。防衛大学校で課業終了後に校友会で身体を動かすように、空幹候校でも課業終了後はサッカーやランニング等で身体を動かしますし、休日は同期と遊びに出かけます。しかしながら、本質的に異なる部分があることも事実です。そしてこの違いとは、同期の多様さ、そしてより高いレベルを求める空幹候校の教育にあると言えます。この防衛大学校と空幹候校の違いについてよく理解した上で、残りの課程生活に全力で臨み、「自ら考え判断し行動できる幹部自衛官」となれるよう頑張っていこうと思います。



基地祭の観閲行進においてB U及びI 課程混合部隊の指揮を執る様子（筆者：写真右

◇今人生、真っ盛り（29期）

「ペリリュー島訪問記」

岩村 公史（29期 陸上）



パラオ共和国は、日本の真南3000キロに位置する緑に覆われた群島の国である。第一次世界大戦後、この地で30年以上にわたり続いた日本の委任統治の形跡が色濃く残り、パラオ語には2000語以上の日本語が息づいている。80歳を超える老人たちは未だに流暢な日本語を操る。国旗は海に浮かぶ月を表すとされるが、そのデザインは日章旗をイメージしていると言われている。この親近感、日本の委任統治が素晴らしいかったことへの感謝に根ざしていると言う。インフラ整備や教育、産業振興において約80年前まで日本とともに歩んだ歴史が、現在も両国の絆を深めているのだと感じる。

しかし、私がこの国を訪れた理由は歴史的な繋がりを知りたいが為だけではない。20年以上前、米国海兵隊指揮幕僚大学に留学していた時、アメリカ人の同級生からペリリュー島での日米の攻防について質問され、答えられなかった自分の知識不足に悔しさを感じ、それ以来、いつかペリリュー島を訪れ、戦史を現地で学び直すことを夢見てきたからだ。

とうとう、今年、令和5年11月、その夢が叶った。ペリリュー島現地ツアーで戦跡を案内してくれたのは、40代の空挺団OBである平野君だった。彼は1年間の空挺団勤務の後、警察に転身し、現在はペリリュー島戦史伝承のために活動している。彼との出会いは何かの縁を感じさせ、お互いに議論しながら水際部から内陸部へと現地研究が進んでいった。戦史の詳細は割愛するが、ペリリュー島嶼戦では内陸撃破を追求し、バンザイ突撃は禁止され、最後の一人に至るまで敵に出血を強いる激戦が繰り広げられた。石灰岩の小さな洞窟を利用した巧妙な陣地構築は、私が若い頃学んだ斜射側射陣地そのものだった。この為、米国第1海兵師団が数日でペリリュー島を占拠すると宣言するも、逆に殲滅され、米国陸軍に戦線の一部を引き渡し、2ヶ月余をかけても作戦目標を達成出来なかったと言う屈辱的な敗北となった。この敗北が米海兵隊にとっての痛切な経験となり、以降もペリリュー島の攻防が研究され、教訓を引き出すための努力が続けられている。

現地研究の終盤、ペリリュー島守備指揮官であった中川大佐の終焉の場所に到達した。そこは石灰岩洞窟で作られた連隊指揮所跡であり、陸上自衛隊の演習時の連隊指揮所に雰囲気は似ていたが、その意味合いは全く異なっていた。中川大佐が自決した場所はそこから離れた奥深い場所だという。周囲には地雷や不発弾が残っているため、その場所には立ち入ることができなかった。平時においては演習が終われば家族の待つ家に戻れるが、戦争では状況終了はない。同時に指揮官は最後にその命を賭して責任を取る。もし私がその立場に立たされたならば、同じように指揮を執り統率出来ただろうか。中川大佐の立場を慮ると、息が詰まってきた。自分自身もゴラン高原やイラクといった海外任務を経験してきたが、本当の試練はまだ訪れていないと感じた。

ペリリュー島の戦いの結果、中川大佐以下の島嶼守備隊は、フィリピン攻略の為の足掛かりを作ると言う米軍の作戦目標を破碎した。そのため、パラオ諸島の戦略的な重要性は失われ、パラオ本島への米軍の地上進行は果たされず、パラオ人の地上戦闘による犠牲はほぼ皆無だった。中川大佐以下の将兵の勇気と犠牲が、文字通り太平洋の防波堤となり、パラオの人々を守り抜いたのである。この事実も、パラオ人が日本人を慕う理由の一端をなしていると感じた。その証左に、現地のパラオ人の墓地には、パラオ人の墓標と共に日本将兵を慰霊する碑が建てられている。余談ではあるが、ペリリュー島にかつて旧日本軍が作った飛行場は、この数ヶ月の間に米軍によって拡張が進められていた。戦後78年が経過し、新たな戦略的な意味合いがペリリュー島に生まれつつあるのである。

ペリリュー島の戦いには後日談がある。中川大佐（二階級特進され中将）の自決された遺体を米軍が発見し、その遺体をご遺族に渡そうとしたところ、奥様は「未だ部下の方が島から帰られていないので、主人は最後です」と、受け取りを延ばされたという。今はその位置も定かでなく、島に残された部下と共に静かに眠っておられると言われている。

命には二種類あると言う。庇護の安寧と怠惰の中にただ生かされている命と危機と緊張感に満ちた生を己の本能と才知のみで生きる命。後者を貫いた生涯こそが存在の意味を勝ち得るのだ。人が見事に生きるのは難しいが、私もそのように生きたいと思う。

「人生流転」



野村 佳正（29期 陸上）

2023年4月から銚子市に所在する千葉科学大学危機管理学部で教授として教鞭をとっています。名勝「屏風ヶ浦」を望む研究室で思うことは、「人生は流転する。それを乗り越えることができたのは防大教育と同期のおかげだ。」ということに尽きます。

私は戦車連隊長に憧れる機甲科幹部として20代を真駒内第11戦車大隊や第11偵察隊で過ごしました。冷戦さなかの北海道第一線部隊で過ごしたことは今でも夢に出てきます。そして幹部学校、富士学校、戦車教導隊中隊長を経て、陸幕それも補任課選抜係長となり選抜制度の改革を命ぜられました。人計課や教育課等の同期に支えられ何とか職務を全うできたと喜んだ矢先、同期に戦史職を勧められました。これが第一の流転でした。

戦史職は自分に合っている分野だと思い、快く引き受け防衛研究所へ。軍制研究をやりたいと考えていたのですが、東チモールPKOの関係で占領地軍政を研究することとなりました。国内史料だけでなく、現地にも飛んで研究をまとめ、先輩である中谷元大臣への報告も終わり閣議を経て無事PKO派遣へ。達成感があったのですが、大臣報告に恥ずかしくないような専門家にならなくてはと防大安全保障研究科（修士）で学び直しました。

防大では充実した時間を過ごせました。勉強は週に200頁ほどの原書購読と発表があり大変厳しいものでしたが、ホッケー部の面倒もみよとのOB会からの厳しい指導があり、つい夢中になりました。まさに青春のやり直しでした。卒業後は防研に戻ったのは良いのですが、1年で第1混成団第1科長（人事・総務）として沖縄に、これが今後9年にも及ぶ単身赴任の始まり、第二の流転です。

沖縄では改編準備が待っていました。大変な補任業務でしたがここでも同期に助けられました。4科長、監察官、広報室長と同期が就いてくれました。そのような折、徳之島ヘリ墜落事故が発生したのです。部隊が深い悲しみに包まれている時、「安倍総理が葬送式に出席の意向」という情報がもたらされました。大変ありがたい話でしたが、第1混成団で対応できるかという難問にぶち当たりました。ここで、輪倉西方総監の「総監部を空にしてでも沖縄を助ける。」という鶴の一声で、全面的な支援をいただき、また在沖縄海空自衛隊の協力により、何とか終えることができました。関係した皆様に心から感謝しています。

近畿中部防衛局防衛補佐官を経て、防大に新設された安保研博士課程に入校を命ぜられました。戦史を極めるには不可欠との思いでしたが、自分の考えの甘さに叩きのめされることになります。3年で博士をとるというのは無謀に近かったのです。受験者12名中入校を許されたのは6名、その6名のうち卒業できた者は僅かに3名でした。この3年間は防大に泊まり込みで自宅に帰ったのは6日くらいに過ぎませんでした。発狂寸前で卒業でき、その後は防大教授、防衛研究所主任研究官を務めることができました。そして研究成果を『「大東亜共栄圏」の形成過程とその構造』として出版し、自衛隊勤務に感謝と満足をもって別れを告げることができました。退官後は郷里の福井に戻って大学の教員をやりながら実家の寺を継ごうと考えていましたが、そんなに世の中甘くはありません。援護からは京都府精華町で危機管理監の職を勧められました。第三の流転です。

精華町危機管理監の職は大変厳しくそれだけに思い出深いものでした。なぜなら、府や県レベルだと守備範囲が訓練に限定されますが、町レベルだと人材が払底しており、政策の決定、議会答弁、計画立案等全て

やらなければならないからです。大変である一方、これを今まで培った安全保障理論を政策に適合させるチャンスと捉えました。そこで国土強靱化地域計画、地域防災計画、避難行動計画、国民保護計画、新型インフルエンザ行動計画等すべて改定し、実情に合わせることができました。そして、この成果を学会で発表したのです。その成果が認められたのか、そんな折、千葉科学大学危機管理学部から教授招聘の話をいただいたのです。関西から関東へ、実務家から教員へ、第四の流転です。

招聘に応ずるため職務を遂行しつつ、シラバスの作成や引っ越しの準備に追われる中、実家で大変なことが起きていました。檀家減少のため宗教法人を解散するという話です。残りの僅かな檀家さんは兄の寺で引き取ってもらい廃寺とし、本堂等は取り潰し更地になりました。そんな中、施設入所中の実母が急死し、葬儀も何とか済ませ、銚子に赴任したわけです。もう自分は帰るふるさとさえもなくなったなあと呆然としながらも、精華町にいるうちに諸計画の策定も終わり、実家の片付けも終わったのは幸せなことだと思うようになりました。

現在は、寄る年波を感じつつも、学生に手を焼き、研究に熱中しながらも、千葉県で初の大学ホッケー部を設立すべく全国を飛び回っています。まだまだ青春、ここまでこられたのも防大教育と同期のおかげ、感謝です。

「パプアニューギニアからの便り」

～「Know HOW（たて糸）」と「Know WHO（よこ糸）」の関係～



荻原 洋聡（29期 海上）

1 はじめに

今日は2023年9月28日です。先ほど、ウェワクからポートモレスビー（パプアニューギニア独立国（以下PNG）の首都）に戻ってきました。退官後、株式会社エヌ・ワイ・ケイ（日本容器工業）に再就職し、また、隊友会（神奈川県湘南支部）に入会したことから、厚労省・日本戦没者遺骨収集事業に、隊友会卒の1人として、今年3月、7月に引き続き9月15日～30日間の3回目のPNG現地調査派遣の機会を得ました。明日の帰国を前に、頂戴した御題が「今が盛り」とするなら、ここに至った「今でショ！」の先は「減衰モードなのか？」ということも思案しつつ、これまでの身の来し方を含めて振り返ってみたいと思います。

2 私の人生経緯（航跡）上の3度のコペルニクスの転回

振り返ると、高校創立記念講演（2年時）で、第1次南極越冬隊長の西堀榮三郎氏の講話に「自分も南極に行ってみたい！！」と瞬時に憧れたことが、29期海上・土木工学を専攻し、海自・施設幹部の道歩くことになったと思います。そのため「しらせ」乗組みの機会は得ませんでしたが、ディブチ活動拠点事前調整チームとして、4か月間のディブチ勤務（@第1のコペルニクスの転回）等の予想外の体験を伴いながら、機動施設隊司令（海自・八戸）に赴任しました。一冬明けた2011年3月11日の東日本大震災に八戸で遭遇したことは、人生上2度目のコペルニクスの転回の体験となりました。以降、常日頃からの「防災・減災対策」のみでなく、その効果を左右するのは、災害等事象発生直後の対応ぶりとなる【応災（災害対応）能力】如何だと現場体験から痛感しその観点・教訓に至りました。退官後は現在勤務中のエヌ・ワイ・ケイ（日本容器工業）が設立したNPO法人「貯水タンク防災ネットワーク（Chonet（⇔貯・ネット））」の出前講座担当として、「ユスフ大佐の防災・応災・減災セミナー」を主軸に、大震災で痛い目に遭った体験ベースの啓蒙活動を巡航（行）しています（NPO Chonet 貯水タンク防災ネットワーク）。

さて、29期・防大3学年時の冬季訓練で硫黄島研修がありそれ以来、戦没者の遺骨収集の進捗が気になっていました。横須賀総監部施設課長・厚木管理隊長勤務時は、硫黄島・南鳥島の施設維持整備の担当でもあり、幾度か現地に赴きました。その際は、「天山壕慰霊碑」、摺鉢山々頂の「日本戦没者慰霊碑」、「第1・第2御盾特別攻撃隊慰霊碑」、「米国将兵慰霊碑」等への拝礼・献水と、「ふるさと」「里の秋」「Dunny Boy」をフルートで慰霊するようにしてきました。明日を生きたかったのに、たった一度かぎりの人生を、自分の意思に関わらずそれを果たすことができなかった幾多の人々のことを偲べば、その計り知れない犠牲の末に、在り余る恩恵を受けている我々は、そのことに対して何かたいせつなことを忘れ去ってはいないだろうか？という危惧の念が増すばかりです。よりによって世界は、昨年2月末以降、ロシアのウクライナ侵攻という最悪・大愚の現実を目の当たりにしています。日本も真珠湾攻撃で戦端を開いた結果、もたらしたものは何だったのでしょうか？約240万の戦没者のうち、未だ112万余柱が未帰還（内約30万柱は海没）で、今回派遣されたPNGには今も約7万柱が野晒しのままなのです。

3 第3のコペルニクスの転回：PNGでの戦没者遺骨収集現地調査派遣

隊友会では、同じ場所へはできるだけ同一人物を派遣する方針もあり、日本軍が降伏調印をしたウェワクでは、今年3月・7月・9月の現地調査が計画され私が派遣される機会を得ました。

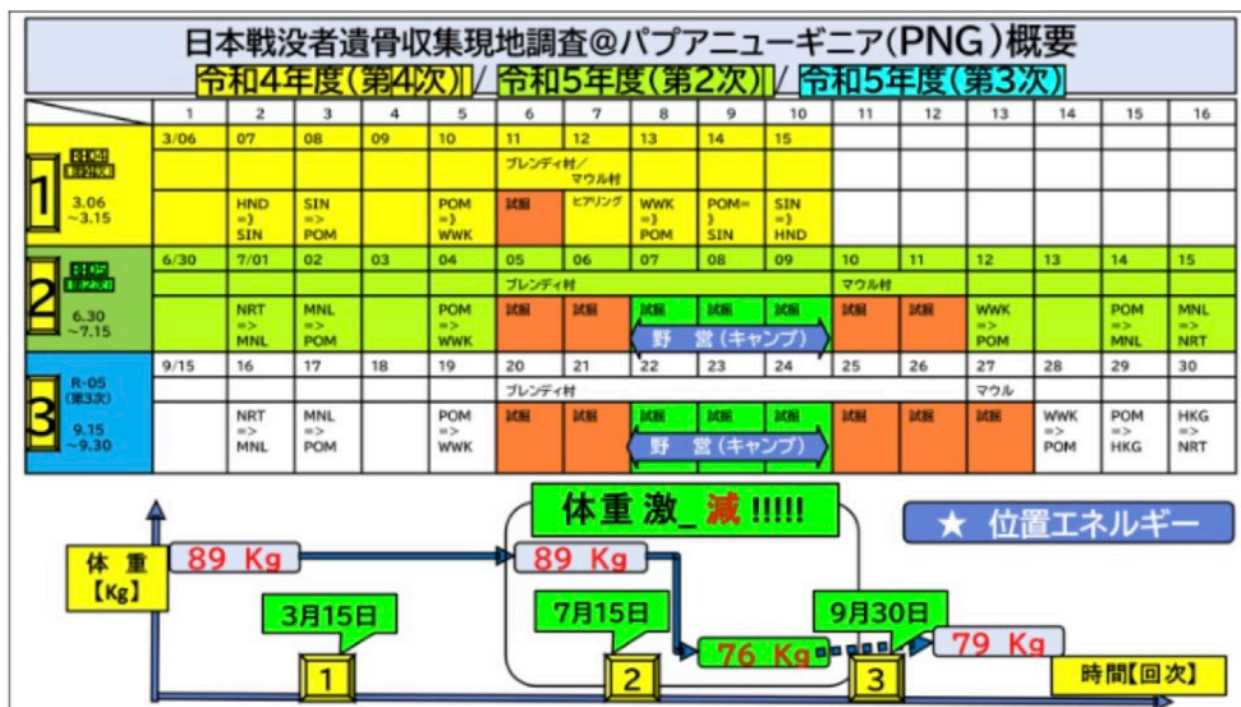
ミッドウェイでの敗戦以降、制海権・制空権を失ったPNGでの戦いは補給を絶たれ、熱帯雨林ジャングルの中で「ジャワは天国、ビルマは地獄、死んでも帰られぬニューギニア」という戦う以前に飢えと病に幾多の将兵が斃れる凄惨な戦いでした。2回目の派遣（7月）時は雨が多く泥濘の中での活動でした。私自身、出国前に89kgだった体重が、帰国後は76kgまでに激減したので、当時の戦いの厳しさが如何許りかとの疑似追体験をしました。

コロナで活動中断され再開された3月の現地調査では、2日間試掘チャンスがあり、初日は十数か所試掘するも御遺骨の発見に至らず、2日目は激しいスコールで作業はできず現地ヒアリングで新たな情報を得ました。7月（7日間）9月（8日間）の現地調査は2泊3日の野営（キャンプ）も実施し、百数十か所を試掘するも御遺骨発見はなく、いよいよあと1時間余りで撤収するという時、飯盒が2つ壊れ、さらに1mほど掘り進んだとき、2柱の御遺骨を発見・収容するに至りました。ここに埋められる時に見収めた光から80年余を経て、ようやく再び見える今の世をどのように観て想われるだろう？と思いつつ、脆くなってしまった頭蓋骨等を収容させていただきました（合掌）。



4 終わりに

我々が村から埋葬地までジャングルの中を1時間余りかけて向かう途中、幾度か小川を渡る箇所に遭遇すると、あっという間に「橋」ができるのです。村人たちがジャブジャブと川に入って行き、石を拾い集めて飛び石橋にして、我々がコケないように、自らは水の中を歩き、飛び石を渡る私の両脇を支えてくれます。全てにおいて献身的な支援をする村の人々総出の支援に頭が下がるばかりでした。終戦間際、柴田陸軍中尉は匿われた村で寺子屋を開き子ども達に読み書きを教えていました。PNGは長い植民地時代を経て1975年にオーストラリアから独立しました。が、その初代ソマレ大統領は、柴田中尉が教えていた当時8歳のソマレ少年でした。PNGの人々は大変な親日家だと感じたのはそのような背景もあるようです。



昼間の作業中はひたすら試掘に専念しますが、それ以外の時間は、村の人々、特に次世代を担っていく子ども達との交流を心がけました。その中で、この3回の派遣の間、私に引っ付き虫で私の荷物を持って道案内をしてくれた12歳のエンディ君には、私の専属カメラマンを勤めてもらいました。最終日、埋葬地を後にして村に戻る途中、彼がぽつりと私に語りかけた言葉は、私の第3のコペルニクスの転回となりました。

「Yousou, when I will grow up, I will keep finding bones.

(洋聡、僕が大きくなったら、遺骨を探し続けるよ。)」

思いがけない、でもありがたい言葉に息が詰まり涙を堪えました。ただし、心強いサポーターの存在に力づけられますが、御遺骨を捜さなければならないのは我々日本人の責任です。彼の夢はPNG陸軍に入ることのようなので、いつの日か彼が日本に来て再会できることが今の私にとっての長い夢になっています。

ここしばらくは自分にできること(得意技)を、無理なくできるうちに、さりげなく、ひとつ、ひとつ身をもって、試(実験)してみる楽しさを感じているところです。

それにつけても、何故争いは無くならないのか?今、私の頭、心の中をぐるぐる廻っている言葉にその解決の端緒があるような気がします。それを以て、パプアニューギニアからの便りを閉じたいと思います。

生きとし生けるもの

～ たった、いちど限りの、永遠 ～

【北海道・知床・キネトコ映画館】

あなたが 生まれて来たときは、
 あなたは 泣いていて
 周りは 笑っていたでしょう。

だから、あなたが 死ぬときは
 あなたは 笑っていて
 周りは 泣いているような 人生を送りなさい。

【死ぬことが終わりではない アメリカインディアンの生き方】

「85会と剣道の取り組みについて」

村上 和彦（29期 航空）



はじめに

令和5年11月初旬、29期航空同期生の長島純さんがアフリカの在ブルキナファソ日本国特命全権大使として、首都ワガドゥグに着任されました。長島さんは、防大同窓会29期航空代議員を務めておられましたが、令和5年9月末に赴任の命を受けられた際、代議員の交代について後述する統一期85期会（85会）の総括幹事を背景として当方に依頼がありました。本寄稿には、長島さんが最も相応しいと思いますが、やりがいをもって取り組ませて頂いている85会、また、小1から始め、ブランクはあるものの約50年ライフワークとさせて頂いている剣道の取り組みをその礎となった防大剣道部4年間の思い出を含めて紹介させて頂くことにより、テーマに沿った寄稿としてご了承頂ければと思います。

85会について

85会は、陸、海、空幹部候補生学校統一期85期生(1985年春入校)をベースとした飲食を伴う親睦会で、市ヶ谷勤務者が多くなった平成14、5年頃、最初は、陸の同期生により、市ヶ谷防衛省近傍のレストランで始まり、平成23年の秋頃からは、海、空同期生にも拡大された旨、お聞きしています。

85会が海、空に拡大された頃、私は目黒勤務で、市ヶ谷勤務で空幹事の梅田さんから連絡を頂き、目黒の空同期生に案内しつつ参加、平成28年5月定年退官となるも継続して参加させて頂いていました。85会の企画、案内、進行等を行う総括幹事は、創始以来、市ヶ谷勤務現役陸同期生でしたが、OBながら平成29年5月期から担当させて頂いています。現在85会は、陸幹事は城戸さん、海幹事は中尾さん、空は当方兼務、受付会計を主に空の美川さんに担任頂いて開催されています。

85会参加者は、陸、海、空85期B(防大卒)が主体ですが、U（一般大）、I（部内）と共に、最近は29期生として入校の1年時退校の一般大出身者や29期生と高校同級生で防衛関連会社に勤務する方等、緩やかな集まりとなっています。参加人数は、私が総括幹事をさせて頂いてから25回ですが、16名から82名、遠くは九州、北海道、関西、東海地区から参加頂いています。同期生の有難さや絆をより強く感じています。

令和5年には、シンガポール留学生、陸の陳勝家(タン・シンガ)さん(通訳会社等経営)が来日の機会に、85会参加と伴に、卒業以来約38年ぶりに防大を訪問頂きました。陳さん防大訪問では、松本学校長及び荒井副校長表敬、資料館、総合情報図書館、授業状況見学、陳さんが学生時代所属の銃剣道部練習状況見学及びOBとして学生への激励、最後は、私が学生時代所属の剣道部の稽古も見学頂きました。この訪問は、同期の佐伯さん、板宮さん、納富さんの同期生の調整支援を得て実現したもので、85会開催を継続してきた同期生の縁によるものと有難く思います。

85会は、同期生をベースとして、気楽に語り合い、旧交を温め、新交をつくり、楽しい時間を共有できる場として、できる限り長く継続してゆければと考え、微力ながら、自己の健康に留意しつつ、総括幹事を続けさせて頂きたいと考えております。



令和元年 85 会、十条駐屯地内食堂にて

剣道の取り組みについて

私と剣道との出会いは、昭和42年、小1の時、警察予備隊出身で陸上自衛官の父が、図体はでかいが泣き虫の私の根性を治そうと、当時警視庁剣道指導室 教師の伯父の勧めで竹刀、剣道着、袴、剣道具一式を購入し、千葉県野田市内の春風館道場に通わせたのが始まりでした。暫くは嫌々ながら稽古に通っていましたが、試合で入賞して小さな盾を頂いて興味を持ちました。その後、小学校で4校(神奈川、千葉2、埼玉)、中学校で2校(沖縄、福岡)の転校を経験するも継続し、中3時に福岡で初段を頂きました。しかし、進学した私立高校では、通学と父の異動を考慮して寮生になるも学校方針で寮生の部活は禁止、陸自を定年退官して間もない父の勧めもあり、防大に昭和56年4月、29期生として入校、もう一度やってみたいという思いから剣道部に入部させて頂きました。

防大入校時の学校長は、第4代の土田國保先生でした。私を剣道に導いた伯父は、当時、警視庁剣道指導室師範で、土田先生と面識があり、伯父から聞いて私の入校をご存知であった旨、後にお聞きしました。土田先生は、平日週2から3回、剣道部稽古に剣道着と袴姿で颯爽と来られ、30分程学生と稽古され、颯爽と戻られました。私は、初心者同様の低体力者で稽古についてゆくのがやっとでしたが、土田先生がお見えの際は、真っ先に稽古をお願いするよう心掛け、互角稽古がすぐに懸り稽古になるも、毎回、お声がけを頂き励みになりました。

元警視總監の土田学校長のご高配により、毎年6月頃、剣道界を牽引している警視庁剣道指導室、特錬(術科特別訓練員)の十名程の先生方が来校されました。全日本選手権大会や警察選手権大会で優勝経験のある錚々たる先生方による「これぞ警視庁」という基本に忠実な正しく豪快な剣道を眼前で拝見し、基本を重視した稽古、指導稽古を頂く機会を得ました。他の大学剣道部では成し難い貴重な経験をさせて頂きました。私にとって、8月夏季合宿、1月の寒稽古、3月春季合宿は、それぞれ関門でした。特に1学年時、校外夏季合宿は、最難関でした。酷暑、早朝の駆け足、午前2時間半、午後3時間、合計5時間半の稽古、食事が殆ど喉を通らず、血尿が出て清涼飲料水で、何とか「生きている」状況の中、先生、顧問、上級生、同期生の励ましで何とか乗り切りました。私は疲労困憊、宿泊所から剣道具等持参で、足裏の血豆が破れた両足を引きずりながら、鉄道を乗り継ぎ、親類宅に何とか辿り着き丸二日間眠り続けました。一生忘れ得ぬ経験であり、爾後の私の剣道の取り組みの原点になりました。11月審査にて2段昇段、2学年時には3段に昇段、4学年になり、剣道部年間最大目標の関東学生優勝大会の選手に選ばれ、試合に出場させていただきました。11月4段に昇段、土田先生と稽古の機会を得て、1学年時は、互角稽古が直ぐに懸り稽古になりましたが、「三本勝負」とお言葉を頂き、文字通り、互角に稽古ができるようになっていました。4学年1月寒稽古が終わり最終日恒例の納会の席上、土田先生から、「四年間で強くなりましたね。卒業後も継続してください

い」とお言葉をかけて頂き、卒業記念として贈呈頂いた銀盃に注いで頂いたお酒の味が何とも美味しく感じられました。



土田学校長との稽古
(還暦祝いの防大校章入り胴を装着)



第 33 回関東学生優勝大会
(日本武道館)

剣道部での4年間が礎となり、奈良、奥尻島(北海道)、浜松、那覇、防大、春日(福岡)、檜町(東京)、ヒッカム(米国ハワイ州)、目黒、府中、市ヶ谷の各基地等にて 諸先生、諸先輩のご指導を得て継続できました。5段は那覇、6段は春日、7段は市ヶ谷の各勤務時に昇段させて頂きました。

剣道6段以上の空自隊員による剣修会の第5代会長を約7年間務めさせて頂きました。平成28年2月、平成27年度空自武道決勝大会では、剣道の部・審判長を務めさせて頂き、同年5月定年退官となりました。

平成28年6月、民間企業に再就職、事業所剣道部に入部しました。同剣道部では、稽古は、体育館付設道場にて、コロナ禍前は、平日は昼休みを中心にほぼ毎日約15分、コロナ禍に入ってからできない時期がありましたが、現在は、在宅勤務等の関係から週2回程の状況が継続しています。定年退官に伴い、東京都剣道連盟(都連)隷下の東京都 自衛隊剣道連盟／関東自衛隊剣道連盟(関自)所属の自衛隊東武會に入会し、市ヶ谷剣道部の稽古に参加、関自理事、都連自衛隊評議員として、定期会合等に参加させて頂いています。

この他、月1回開催の稽古会に参加、広く剣縁を得ています。また、令和5年度は都連登録審査員の資格を得て、令和5年11月に3段～初段の昇段審査を経験させて頂きました。また、防大剣道部OBとして、防大剣道部の春季及び夏季合宿、寒稽古に数日参加を追求、学生と共に汗を流し元気を頂いています。



70 周年記念行事集合写真



70 周年記念対抗試合



70 周年記念合同稽古

令和4年4月からは、防大剣道場を修練の場とした共通体験を組織基盤とする剣友会の理事長として、各種事業(活動)に携わらせて頂いています。令和4年12月の創部70周年記念行事は、コロナ禍ながら、全国からOB約50名、学生約60名の合計約110名が参加し、防大剣道場を中心に、OBと剣道部学生との対抗試合、合同稽古等が実施されました。令和5年6月、コロナ禍中止になっていた東大・防大OB親善稽古会が4年ぶりに開催、東大学内にて双方合わせて約50名が参加して、対抗試合、親善稽古、懇親会が開催され、交流が図られました。

終わりに

剣友会主要事業に年会誌『銀盃』の発行があり、29期生卒業時の『銀盃十九号』(昭和60年6月発行)に土田学校長ご寄稿の「一生の道“剣道”」が掲載されています。ご寄稿は、冒頭、若木のような29期新入生の野太い最上級生への変貌を「鍛錬の賜物」と評された後、剣の道はむしろこれからで、まさしく一生をかけての道であることを忘れないで欲しいと強調され、次の5項目を上げて補足されています。(補足は省略)

- 剣の道の第一の要諦は、“心を正す”ことにある。
- 剣の道は、諸君の将来の任務遂行上、必要とされる精神要素のすべてを具備。
- 剣の道は、議論ではなく、実践にある。
- 真理は、平凡な事実の中にある。
- 己れの“剣”に淫(いん)する勿れ。

ご寄稿は、最後に、任務や病気等により剣道から離れ、中断を余儀なくされても、一生抱いてゆける、又抱いてゆくべきは、“心の剣”であり、機会があれば、再び体調を整えて道場に姿を現し、技の巧拙は二の次にして、心境の錬磨に汗を流すことの仕合わせを決して忘れないで欲しいと結ばれています。

土田先生は、平成11年7月4日、77歳でご逝去の直前迄、後進の指導をされ、正に一生の道“剣道”を実践されました。今後も、剣道修行の道標として取り組ませて頂きたいと思います。土田先生の墓石は、かつては秋田にあったようですが、現在都内在住の奥様の絹子様からご親族を含めて墓参の都合を考慮して埼玉県所沢市内の霊園(所沢聖地霊園)に改葬された旨、ご教示を頂きました。所沢市は、奇しくも私を剣道に導き励ましてくれた伯父(昭和63年警視庁剣道指導室 副主席師範で退官、平成24年に84歳で他界)が長年在住した地です。

いつまでできるかわかりませんが、これまで、ご指導を頂いてきた諸先生、諸先輩に感謝しつつ、剣道を一生の道として、剣道最高位である8段昇段を目標の一つにおいて取り組ませて頂くと共に、自分の剣道の礎を作って頂いた防大剣道部の発展を祈念しつつ、微力ながら取り組ませて頂きたいと思います。

◆活動報告

◇令和５年度 防衛大学校同窓会代議員会（実施報告）

同窓会は令和６年３月２日（土）、令和５年度代議員会を実施させていただきました。
以下、議決結果等について報告します。

１ 令和５年度代議員会開催の経緯と代議員の出席状況

（１）開催の経緯

令和５年度事業計画に基づき完全Web方式により代議員会を実施しました。

（２）代議員の出席状況

代議員２８９名中、出席２０９名（７２．４％）

出席内訳：参加者６８名、委任状１４１名

２ 代議員会議決結果

下記３つの議案について議決を行った結果、賛成多数で、それぞれの議案についてご承認いただきました。

第１号議案 令和４年度同窓会事業報告・会計決算報告・会計監査報告

第２号議案 令和６年度同窓会事業計画（案）・事業予算（案）

第３号議案 令和６年度同窓会役員の選出

３ 令和６年度同窓会事業計画

（１）事業計画の方針

同窓会は、母校の充実・発展に積極的に寄与するとともに、会員相互の親睦・交流、社会活動への寄与等の事業を推進する。この際、期生会・地域支部（海外支部含む）等と連携した会務運営基盤の充実と業務の一層の効率化に留意する。

（２）母校の充実・発展への積極的に寄与の考え方

学校との意思の疎通を図りつつ、学生の修学・研鑽意欲の高揚及び期生会活動の充実等に資する支援、地域支部等による学生の部隊実習激励等を積極的に行い、母校の充実発展に寄与する。

特に国際交流支援業務を含めた学校からの要望に柔軟に対応する。

（３）会員相互の親睦・交流事業実施の考え方

会員に同窓会活動の状況を積極的に発信するとともに、ホームページやWeb会議システム等を活用して期生会・地域支部（海外支部含む）等との緊密な連携を図りつつ各種事業を実施し、会員相互の絆の強化及び期生会・地域支部等の活性化に寄与する。

また、会員相互の親睦・交流事業のうち、各種競技会につきましては下記の通り計画する。

○ テニス大会 ５月

○ 囲碁大会 １０月

○ ゴルフ・レギュラー大会 １１月

○ ゴルフ・シニア大会 １１月

（４）社会活動への寄与事業実施の考え方

全国防衛協会連合会主催の「防衛大学校教授による安全保障講座」を協賛し、安全保障に係る知見敷衍・意識高揚に寄与する。また、ホームページに掲載する同窓会人材バンクの整備、周知、人材紹介等及び地域支部等が実施する社会貢献活動等の支援を通じて社会活動へ寄与する。

（５）会務運営基盤の充実事業実施の考え方

同窓会の基盤となる期生会及び地域支部（海外支部含む）等との連携を強化して会員の状

況把握と各組織の充実・発展を図るとともに、会員（寄付等を含む）の会費納入の促進及び会議システム等の更なる活用により会務運営基盤の充実を図る。

また、地域支部等（海外支部含む）の現況把握を推進するとともに、会則・細則の見直しに基づく地域支部等（海外支部含む）への支援を実施する。

4 同窓会本部からの報告事項

（１）会費納入促進施策（遅延金の廃止）及び今後の資産見積

ア 遅延金の廃止

昨年 の 代 議 員 会 で の 議 論 の と お り 、 こ こ 数 年 の 会 費 納 入 率 の 著 し い 低 下 に よ り 、 母 校 支 援 以 外 の 経 常 的 な 同 窓 会 の 運 営 を 断 念 せ ざる 得 ない 危 機 的 な 財 政 状 況 に な っ て お り 、 こ の 状 況 を 少 し で も 改 善 す る た め 、 一 人 で も 多 く の 未 納 者 か ら の 納 入 を 期 待 し 遅 延 金 制 度 を 廃 止 し た 。

イ 今後の資産見積

令 和 ７ 年 度 以 降 は 、 年 度 事 業 予 算 の 財 源 と な る 同 窓 会 会 費 が 積 み 立 て 方 式 と な る こ と か ら 、 令 和 ３ 年 度 と 同 等 の 収 入 が 期 待 で き る た め 、 こ の ３ 年 間 で 減 少 し た 総 額 約 ４ １ ０ ０ 万 円 の 資 産 を 回 復 す る た め に は 、 令 和 ６ 年 度 と 同 等 の 事 業 予 算 規 模 を 継 続 し た 場 合 、 約 ９ 年 か か る と 見 積 も ら れ る 。

（２）令和５年度同窓会事業の実施状況

同 窓 会 は 、 「 母 校 の 充 実 ・ 発 展 に 積 極 的 に 寄 与 す る と と も に 、 会 員 相 互 の 親 睦 ・ 交 流 、 社 会 活 動 へ の 寄 与 を 重 視 し て 着 実 に 事 業 を 推 進 す る 」 を 方 針 と し て 同 窓 会 事 業 の 実 施 、 同 窓 会 業 務 の 運 営 を 行 っ て い る 。

令 和 ５ 年 度 は 、 コ ロ ナ 禍 の 影 響 度 が 減 少 し 、 母 校 支 援 及 び 同 窓 会 計 画 の 各 種 行 事 、 地 域 支 部 等 の 活 動 等 が 再 開 さ れ る 一 方 で 、 卒 業 直 後 の 会 費 納 入 率 の 低 下 が 継 続 し て い る こ と か ら 、 完 全 W e b 方 式 に よ り 代 議 員 会 、 講 演 会 （ 講 師 ： 山 崎 前 統 合 幕 僚 長 ） を 実 施 す る と と も に 懇 親 会 を 中 止 し た 。

5 同窓会本部からのお知らせ

（１）地域支部長等による学生の部隊実習激励

こ れ ま で 同 窓 会 会 長 自 ら 実 施 し て い た 事 業 を 、 令 和 ５ 年 度 か ら 、 よ り 多 く の 学 生 を 激 励 す る こ と を 目 的 と し て 地 域 支 部 長 等 に 実 施 し て 頂 く 事 業 に 変 更 し た 。

令 和 ５ 年 度 は 、 ５ コ 地 域 支 部 等 に よ り １ ６ コ 駐 屯 地 、 基 地 等 に お い て 学 生 ４ ７ ３ 名 に 対 し て 激 励 を い た だ い た 。 こ の 際 、 防 衛 大 学 校 訓 練 部 、 同 窓 会 事 務 局 、 地 域 支 部 等 と の 齟 齬 も あ っ た こ と か ら 、 令 和 ６ 年 度 は 、 防 衛 大 学 校 訓 練 部 の 部 隊 実 習 計 画 の 具 体 化 と 並 行 し 努 め て 早 期 （ ５ 月 下 旬 を 目 途 ） に 部 隊 実 習 先 に 関 す る 情 報 を 地 域 支 部 等 へ 提 供 す る と と も に 連 携 強 化 を 図 る 。

（２）同窓会会則・細則の見直しの方向性

令 和 ６ 年 度 の 新 規 事 業 と し て 、 同 窓 会 会 則 及 び 細 則 に つ い て 、 現 在 の 同 窓 会 活 動 及 び 同 窓 会 運 営 要 領 等 と 乖 離 し て い る 部 分 の 見 直 し を 検 討 す る も の で 、 同 窓 会 事 務 局 内 で の 検 討 結 果 で 見 直 せ る 細 則 に つ い て は 、 理 事 会 で 審 議 し 見 直 す と と も に 、 会 則 と の 整 合 が 必 要 な 事 項 は 代 議 員 会 に お け る 議 事 と し て 審 議 を 予 定 す る 。 こ の 際 、 地 域 支 部 等 に か か わ る 会 則 ・ 細 則 の 見 直 し に つ い て は 、 地 域 支 部 等 の 現 状 把 握 及 び 地 域 支 部 長 等 か ら の 意 見 を 反 映 す る 。

（３）令和６年度代議員会の予定

令 和 ６ 年 度 の 代 議 員 会 の 開 催 時 期 は 、 令 和 ６ 年 ２ ～ ３ 月 で 検 討 中 で あ り 、 令 和 ６ 年 １ ２ 月 末 頃 に ご 案 内 予 定 で あ る 。

（４）ホームビジットディ（HVD）、ホームカミングディ（HCD、HCD２）の予定

ア 同 窓 会 事 業 で あ る ４ ７ 期 生 の H V D は 、 令 和 ６ 年 度 開 校 祭 （ 令 和 ６ 年 １ １ 月 予 定 ） に 併 せ て の 実 施 予 定 で あ り 、 今 後 学 校 側 と 調 整 し ４ ７ 期 生 会 へ 連 絡 す る 。

イ 学 校 行 事 で あ る ２ ４ 期 生 H C D は 、 令 和 ６ 年 度 卒 業 式 （ 令 和 ７ 年 ３ 月 予 定 ） に 併 せ て の

実施について、学校側と調整するとともに、同じくHCD2は、12期生が令和6年度入校式（令和6年4月予定）に、13期生HCD2は、令和7年度入校式（令和7年4月予定）に併せての実施について、今後、学校側と調整する。

（終わりに）

令和6年度の防大同窓会事業が計画通り実施できますよう、ご支援・ご協力をお願い申し上げますとともに、同窓会員の皆様が益々ご健勝で過ごされますことを心より祈念しております。

（同窓会本部事務局）

◇46期生ホーム・ビジット・デー（HVD）

令和5年11月11日(土)、4年ぶりに一般開放される防衛大学校の開校祭行事に合わせて、46期生のHVD(ホーム・ビジット・デー)が実施されました。風が強くやや肌寒さを感じながらも前日からの雨が止み、予定どおりの行事が執り行われました。

HVDは、防大卒業生が卒業20周年目の節目に防衛大学校に集い、現役会員の同窓会意識の高揚や同期生の団結の強化等を目的とした防衛大学校同窓会事業の一つです。

46期生のHVDは、4月ごろから先行的かつ入念な準備を行い、11月11日(土)の本番を迎えました。



46期生HVD集合写真(学生会館4Fにて)

【右上写真は、HVD準備に尽力した向3等海佐、難波3等陸佐】

当初、46期生の代表である海幕防衛部防衛課編成班長 臼井1等海佐(46期期生会長)、空幕運用支援・情報部運用支援課部隊訓練第2班長 和田1等空佐、統幕運用部運用第1課防衛警備班長 石岡1等陸佐の3名が久保防衛大学校長を表敬し、HVD開催における便宜に対する謝意を伝えるとともに、久しぶりに訪れた防衛大学校の状況を学校長からお伺いし談笑しました。

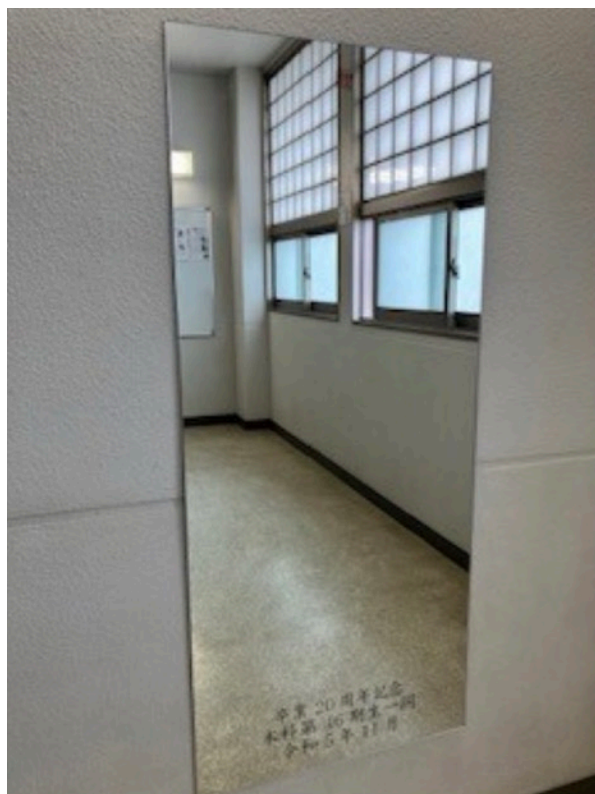


久保防衛大学校長と代表者の懇談



久保防衛大学校長と代表者の記念撮影

記念品として、姿見が2号学生隊舎の3階と4階の間の踊り場に設置されました。



その後、学生会館4階ホールにおいて、ご家族を含む約160名が参加し、防大46期卒業20周年記念懇親会を実施しました。会の初めに、久保学校長から防衛大学校の新たな取組等についてご教授頂くとともに、46期期生会長の挨拶から会がスタートしました。会の終始を通じ久々に顔を合わす同期及び家族との懇親を深めました。また、会の中では、応援団からのエールを受けるとともに逍遥歌及び記念撮影で会を締めくくりました。



久保学校長祝辞



臼井46期期生会長挨拶



逍遙歌斉唱
棒倒し予選



応援団によるエール
46期生の棒倒し観戦風景

46期生は、懇親会終了後、自由行動、次いで棒倒し予選を観戦しました。

HVDの最後を、汐入駅近くの「カレー本舗 ベイサイドキッチン」に移し、参加可能な者50数名が参加し、夕食会が実施され、更なる親睦を深めました。会の当初には村川防衛大学校同窓会長から国防の中枢を担う46期生に対する激励を頂きました。



村川同窓会長からの激励



懇親会風景

最後に、今回のHVDにより46期生会は、より団結を強固にするとともに国防に対する決意を新にしました。

(文責：同窓会事務局HVD担当者及び46期HVD担当者)

◇第23期生ホーム・カミング・デー（HCD）

23期生ホーム・カミング・デー（以下HCDという。）が、令和6年3月16・17日の両日及び3月23日、防衛大学校令和5年度卒業式典（本科68期生等）への学校長招待行事等として実施されました。今回のHCDは、卒業式が3月9日(土)～3月24日(日)の内1日と、実施日とその直前まで分からない状況での準備でした。このため、23HCD実行委員会では、参加予定の会員と御家族の旅程・宿泊予定等の変更とその負担等を勘案し、従前の学生の行動を基準とした実施日である3月17日に卒業式が実施されることを想定して、3月16日に23HCD記念懇親会を実施することを確定させ、卒業式がいつになっても柔軟に対応できるよう防衛大学校との綿密な調整の下、実施計画を作成しました。また、複数回の実行委員会の実施及び期生会員へのアンケート調査を行い状況が判明するにつれ、周到に準備を推進しました。3月16日・17日に23期生会総会・記念懇親会及び顕彰碑献花式・防大ツアー等、23日に卒業式典に参列し、23日は荒天だったため観閲式の見学は中止になったものの、HCDを円滑に実施することが出来ました。



23HCD実行委員会の様子

3月16日 23期生会総会・記念懇親会

16日、23期生会行事として総会と記念懇親会が昨年まで慣例で使用されていた平安閣の閉店に伴い、セントラルホテル横須賀で開催されました。15時前から、逐次、23期生会員と御家族の185名が会場に集まりました。会場ではあちらこちらで旧交を温める姿があり、昔話に花が咲く中、総会が始まりました。



総会・懇親会 受付の様子



期生会総会の状況

まず、逝去された同期生23名の方々の学生時代の写真が映し出され、黙祷が捧げられました。その後の期生会総会では、佐々木様の司会の下、藤井様が議長に選出され、会則の改正、新役員紹介等の議決及び紹介等があり、議事は順調に進められました。



岩本前期生会長



岩田新时期生会長



田中新副会長



中島新副会長

総会終了後、23期生で前副校長でもある香月様による記念公演が開催され、防大のこれまでの変遷や苦労話などのお話があり、参加者は、興味深く拝聴されました。



香月前副校長による記念講演

講演終了後、来場した防衛大学校長代理である荒井副校長、村川同窓会長等来賓とともに集合写真を撮影し、その後、記念懇親会が始まりました。



懇親会記念集合写真(1・4・5大隊)



懇親会記念集合写真(2・3大隊)

HCD実行委員長でもある岩田新期生会長から、挨拶とHCD開始後初となる留学生参加者であるシンガポール共和国 冼光華様、タイ王国 タナラッタ・ウボン様お二人の紹介及び翌日の防大ツアーに対する防大への謝辞が述べられました。また、来賓を代表して、荒井副校長及び村川同窓会長から23HCD実施に対する祝辞が述べられました。



岩田新期生会長挨拶



HCD開始後初めてとなる留学生参加者

タイ王国 タナラッタ・ウボン様夫妻(左)
シンガポール共和国 冼光華様夫妻(右)



荒井副校長祝辞



村川同窓会長祝辞

岩本前期生会長による乾杯後、各テーブルでは歓談の輪が広がり、御家族を含め皆様は楽しい時間を過ごされました。途中、余興として、今回に合わせ予め実施した特別体力検定の褒章授与式を開催し、東防大訓練部長から各部門の成績優秀者へ表彰状が授与され、会場は大いに盛り上がりしました。さらに各校友会ごとの記念集合写真の撮影や記念懇親会全般統制である福本様のフルート演奏も行われました。終盤には参加者が輪を作り肩を組んで逍遙歌を斉唱し宴も最高潮に達しました。なお、次年度の準備のため24期生の方々も参加されました。最後に、期生会副会長である中島様による乾杯が行われ、記念懇親会は大盛況のまま幕を閉じました。



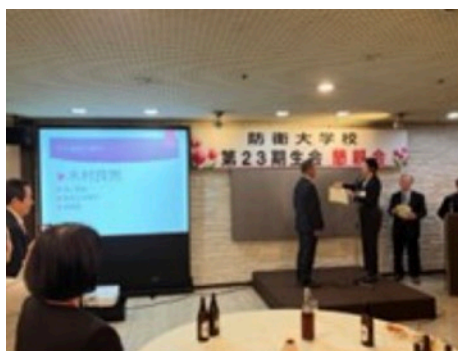
岩本前期生会長による乾杯



荒井副校長と岩田新期生会長



村川同窓会長と洗光華様ご夫妻
(村川会長の当時のサブ長が洗光華様)



東防大訓練部長から褒賞状授与



体力検定各部門褒賞者



フルートを披露する福本様



肩を組み逍遙歌を歌う23期生



肩を組む、期生会役員、同窓会長等



逍遙歌を歌う23期生の御家族



23HCDを研修する24期生



中島副会長による中締の乾杯

3月17日 顕彰献花式、防大ツアー等

17日は晴天に恵まれるも強風が吹きやや肌寒い中、早朝から活動が開始されました。行事には、御家族・御遺族を含め150名が参加し、京急バス等で防大正門に到着後、防大職員の皆様に準備していただいた防衛学館内の控室に陸海空要員ごとに入りました。



防大正門の受付



防衛学館の受付（陸）



防衛学館の受付（海）



防衛学館の受付（空）

今HCD全般統制である日高様からの全般説明の後、防衛学館を出発し桜のつぼみがほころびかけた校内を移動、記念講堂を見学した後、殉職者顕彰碑献花式、時計台前階段での記念集合写真撮影、その後、4つのグループに分かれて防大ツアーとして資料館、学生舎及び学生会館の見学を行いました。学生が休暇中だったため、非常に静かな中での防大ツアーとなりました。



全般説明



全般説明を聞くツアー参加者



本館前を移動する参加者



記念講堂内の見学



殉職者顕彰碑献花式



記念集合写真撮影



学生会館見学



資料館見学

学生会館PXでは防大土産等を買う姿が見られました。

また、お昼は、防衛学館の控室にて陸海空要員ごと昼食会が行われました。その後、23日の卒業式典参列要領等の説明があり、一旦、解散となりました。



学生会館での買い物風景



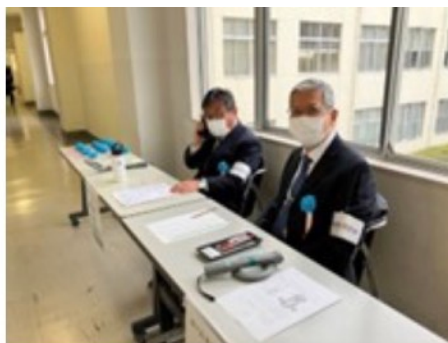
昼食会の状況

3月23日 本科第68期生等卒業式

23日は、雨が降り出しそうな中、23HCD実行委員の方々が0745配置を完了し、0800から17日と同様、正門及び防衛学館内において受付を開始しました。受付開始後、雨降ったり止んだりする中、当初式典開始前に屋外で計画していた記念集合写真撮影を、式典終了後に記念講堂内での写真撮影に変更しました。卒業式にはご家族を含め95名の方が参加されました。卒業式参加のため、0910頃防衛館を出発し、0930記念講堂のHCD席に着席を完了しました。



正門受付



防衛学館受付



記念講堂への移動



HCD席に着席

概ね予定通り1000から岸田内閣総理大臣への栄誉礼で式典が開始されました。コロナ禍のため、昨年までは代表者のみに対する卒業証書授与を行っていましたが、従前に戻り卒業生全員に対しての卒業証書授与が行われました。



栄 誉 礼



卒業証書授与

次いで、久保学校長から式辞があり、卒業生に対してコロナ禍での学生生活に対する慰労及び幹部自衛官としての人格形成・陶冶の重要性のお話がありました。そして、卒業生である23期生がHCDとして卒業式典に参列されている旨の紹介がありました。その際には、23期生全員が起立をして、紹介に応えられました。



久保学校長式示



起立して紹介に応える23期生一同

岸田内閣総理大臣、木原防衛大臣からは、卒業生に対して幹部自衛官となる心構えについての訓示が行われるとともに、来賓代表として宇宙航空研究開発機構(JAXA)理事長山川宏氏からは、情熱をもって仕事に向き合い、仲間とその情熱を共有する重要性のお話がありました。式典が進み、防衛大学校学生歌斉唱となり、23期生全員が卒業生達とともに学生歌を声高らかに歌われました。そして、卒業式の最後に代表学生の掛け声で卒業生が一斉に帽子を投げ、卒業生たちは会場を後にしました。



一斉に帽子を投げる68期生



宙に舞う帽子

任命宣誓式終了後、式典会場において記念集合写真撮影が行なわれました。



任命式に臨む陸海空曹長



宣誓書を総理大臣に渡す陸海空代表



記念集合写真

記念撮影終了後、雨天のため観閲行進が中止となり、防衛学館に移動し、解散式が実施されました。解散式においては、残念ながら見る事が出来なかった観閲式の写真等の紹介がありました。会長、副会長からは、11年後に実施されるHCD2での再会を期すことが誓われました。また、本HCDで尽力してくれた防衛大学校防衛学群の担当者への謝意、そして23HCD実行委員としてこのHCDを支えられたご同期の方々への謝意もありました。

そして最後に、会長からは、今回の実行委員が次回のHCD2においても23期生会を支えてくれるだろうとのお話で締めくくられました。解散式の後、17日に防大ツアーに参加出来なかった方の防大ツアーが香月前副校長の案内で実施されました。



解散式



武居副会長挨拶



防衛学群の担当者に対する謝意



実行委員に対する謝意及び期待

最後になりますが、2年間に及ぶHCDの準備・実施に当たられた岩田期生会長はじめ23期生の実行委員の方々のご苦勞とご決断に敬意を表するとともに、今回研修をされた24期生及び25期生の次年度、次々年度のHCDのご成功を祈念申し上げ締めくくりたいと思います。

(防大同窓会本部事業部HCD担当 31期永井、32期榮村)

◇第10期生・第11期生ホーム・カミング・デー2（HCD2）

第10期生・第11期生ホーム・カミング・デー2（以下、HCD2という。）が、令和5年4月5日（水）に行われました。

コロナ禍のため、過去3年は実施が見送られましたが、本年は第10期生及び第11期生がご家族合わせて、それぞれ107名、114名、合計221名の方が行事に参加しました。

本年のHCD2は晴天に恵まれ、8時頃から第10期生及び第11期生とご家族は、正門右側のHCD2専用の入り口を通過し、桜吹雪が舞う中、控室が準備された防衛学館に向かいました。正門及び経路上の要点には誘導支援の要員が配置され、入門・移動はスムーズに行えました。

防衛学館の1階は第10期生、2階は第11期生の控室となっており、到着後は、陸・海・空の要員毎に準備された受付で出欠を確認し、資料を受け取って控室に入り、久しぶりの再会に思い出話や近況報告に花を咲かせました。

朝、京浜急行が事故のため一時運行を見合わせたことから、当初予定の集合時間に間に合わなかった方が数名いましたが、受付を終了された方は、定刻に式典会場に向かい、途中、時計台下で久保学校長をはじめ防大の主要な職員を囲んで集合写真の撮影を行いました。



正門の専用受付



専用借上バスで到着



防衛学館での受付



久保学校長を囲んでの第10期生集合写真



久保学校長を囲んでの第11期生集合写真

写真撮影後、式典会場である記念講堂に移動し、用意された指定席に着席しました。車椅子での参加者には専属の防大教官が付き、常時サポートをして頂きました。また、座席についても専用席が用意されました。

なお、京浜急行の事故の影響で遅れた方も振替輸送等を利用して無事に入門し、式典に参加しました。

入学式は、10時の井野防衛副大臣の臨場、防大儀仗隊による栄誉礼で始まり、国歌斉唱、任命・宣誓・申告に続いて、学校長式辞、防衛副大臣訓示、統合幕僚副長による来賓代表祝辞と滞りなく進められました。

久保学校長の式辞では、井野副大臣をはじめとする多くの来賓の方々やご家族に対し、お礼の言葉を述べられた後、防大が実施しているホームカミングデー行事について言及し、第10期生、第11期生の参加につ

いて紹介されました。

学校長は引き続き、これからの4年間、「一つ目は、広く学ぶこと。科学技術について正確な理解をもち、同時に歴史や社会科学について勉強し、さらに民主主義の歴史と民主主義の意義についても学ぶこと。二つ目は、人間を磨くこと。権限に基づいて発した正当な命令に従うのが組織であるが、それがなくとも部下が自ずとついてくるような指導者を目指してほしい。そのためには、知識だけではなく、他人の気持ちを理解する力、自己の感情を抑える能力も必要であり、広い意味での人間力を磨くこと。三つ目には、広く学ぶことを超え、さらに広い視野を持つこと。学生は学外でのアルバイトやインターンをすることは出来ないが、学校がさまざまな機会を用意するので、チャンスに応募して、外の世界を知るように心がけること。」の3点を本科学生に要望されました。

井野防衛副大臣は訓示で、本科学生には、国防を担うという気高い理想を持って入校した学生に敬意を表した後、「不安や心配はあると思うが、一つ一つ慣れていくことが大事であり、慣れれば自然と成長を実感できる。」と述べられました。また、研究科学生には、「専門性を追求し、自分が何をすべきか、あるべき姿を思い描き、学ぶことを期待する。」と述べられました。そして、留学生に対しては、「防大で得た様々な成果、経験を母国に持ち帰り、日本との友好の懸け橋になると共に、仲間と終生変わらぬ友情をはぐくむことを希望する。」と述べられました。

最後に「日本は平和を享受してきたが、世界は今、ロシアのウクライナ侵略を始め、一部の国による国際秩序への挑戦に晒されている。変化の激しい世界で、変化の速い科学技術を駆使し、我が国の平和と独立のために活躍する事を期待する。」と述べられると共に、女子学生が過去最多の103名の入学となったことに言及し、「性別を問わず切磋琢磨することを期待する。」と述べられました。

南雲統合幕僚副長は吉田統合幕僚長の祝辞を代読し、「今は歴史の大転換期であり、30年間続いたポスト冷戦が終わった。力による一方的な現状変更を試みる勢力と法の支配による国際秩序を重んじる二つの勢力が対立している。諸君の先輩は、抑止力を磨き、我が国への武力侵攻を未然に防いできた。諸君の責務は抑止力を強化し、我が国への武力行使を防ぐことである。求められるのは、将来の予測が困難な時代においても、先を見通した戦略と周囲を牽引していくリーダーシップであり、諸君は、防大卒業後、戦略的リーダーになることが期待される。防大は戦略的リーダーシップの素地を学ぶことができる唯一の学校であり、Mission：使命感、Vision：構想力、Passion：情熱を磨くことを要望する。そして、4年間、防大で築いた同期の絆は、将来の統合運用の基盤になる。」と述べられました。

また、留学生に対しては、「諸君は、一人一人が祖国の宝であり、日本にとってもかけがえのない友人である。4年間、防大生活に全力で取り組み、真の友情を築き、相互理解の促進に努めることを要望する。」と述べられました。



式典会場（防大儀仗隊による荣誉礼）



式典会場（久保学校長式辞）



式典会場の指定席



久保学校長式辞



井野副大臣訓示



南雲統幕副長祝辞

入校式終了後、HCD2参加者は顕彰碑を参拝、花輪を捧げて志半ばに国に殉じた10期生4柱、11期生5柱の殉職隊員の慰霊を行いました。



顕彰碑での献花式



観閲式見学用指定席

その後、参加者は陸上競技場に移動してHCD2参加者のために用意された座席に着席し、学生隊のパレード、展示飛行、儀仗隊のファンシードリルなどを見学しました。車椅子での参加者に対しては、サポート役の防大教官が見えやすいように車椅子の向きを調整するなど、細やかな心配りがなされていました。



観 閲 式

パレード見学を終えた HCD2参加者は、小原台を後にして、懇親会会場である「よこすか平安閣」に向かいました。

1415頃から、第10期生が5階、第11期生が6階と会場を分けて懇親会が開始されました。ご家族を合わせて、それぞれ 約100名、110名が参加され、期生会長の挨拶で始まりました。

久保学校長は公務のため、若干遅れて1450頃に会場に到着されました。学校長は、挨拶で、「今年は女子学生の新入生が100名を超えたこと、フィリピンやカンボジアなどでのJICA（ジャイカ）プロジェクトへ学生を派遣したこと、また、今後は ジブチでのプロジェクトに派遣を検討していること」について話をされ、最後に「これからは、良き伝統を守りつつ、変わっていく。」と話されました。

村川同窓会長は、第10期生・第11期生の方に、これまでの同窓会へのご尽力に対して感謝するとともに、「いつまでもお元気で。そして、物心両面の支援をお願いします。」とユーモアを交えて挨拶しました。

懇親会は、盛り上がり、話は尽きない状況でしたが、予定の時間が迫ったため、逍遥歌等の斉唱が行われ、名残惜しい懇親会はお開きとなりました。



同窓会長挨拶（10期生）



学校長挨拶（11期生）



学校長と（10期生）



会場の様子（10期生）



追遥歌斉唱（10期生）



乾杯！（11期生）



同窓会長と（11期生）



会場の様子（11期生）

おわりに、HCD2実施に向け、準備を進められた第10期生・第11期生会役員の皆様のご活動に心から敬意を表するとともに、準備から本番まで本当に親身になってご支援をいただいた防衛大学校職員の皆様に心から感謝申し上げます。

（同窓会事務局HCD2担当 30期海 川原梅三郎 記）

◇第26回防衛大学校同窓会テニス大会

令和5年5月19日（金）、防大同窓会テニス大会が昨年に引き続き千葉市蘇我スポーツ公園フクダ電子ヒルスコートで開催されました。

26回目となる今大会は新型コロナウイルスが感染症法上の第5類に格下げされた以降の実施となりましたが、感染防止対策として千葉市テニス協会の方針に順じて実施されました。すなわち選手はマスクの着用を推奨（試合中を除く）、観戦者はマスクの着用を推奨、大会本部役員等はマスク着用、そして他者への感染拡大を防止する観点から基本的な対策（3密の回避、ソーシャル・ディスタンスの確保、手洗い・手指消毒等の励行、感染が疑われる場合の参加の自粛）を継続実施しました。



荒木ディレクター（27期）写真右



大会会場となったヒルスコート

昨年は、開会式はマイク放送により参加者の集合なし、閉会式も被表彰者のみが集合し、極力密集状態を回避して実施されましたが、今年は会員からの要望もあり全員集合整列しての開会式、閉会式が行われました。



開会式の全員集合整列

開会式では荒木ディレクター（27期）の開会宣言ののち、大会会長である同窓会会長の代理として出席した丸茂同窓会副会長（27期）からの挨拶がありました。丸茂副会長は「若き時代は七転び八起きで頑張ってくれた皆さんですが、OBになられて一転び寝たきりになっては困りますのでケガの無いよう頑張ってください」と挨拶され会場を沸かせました。その後、谷口レフリー（28期）からルール等の説明が行われました。



開会式における丸茂同窓会副会長（27期）挨拶

今年は1期から32期までを5つのクラスに分けて競技が行われました。一番若いグループを「レギュラー」クラス（27～32期）、次に若いグループを「シニアクラス」（21～26期）、次を「グランドシニア」クラス（15～20期）、次を「スーパーグランドシニア」クラス（9～14期）、そしてもっとも歴史あるグループを「レジェンド」クラス（1～8期）として試合が行われました。

「レギュラー」、「シニア」、「グランドシニア」の3つのクラスは各期ダブルス5組の編成による期別対抗団体戦、「スーパーグランドシニア」クラス（9～14期）は、同期ペアによる個人戦、「レジェンド」クラス（1～8期）は、乱数表を用いてペアを作り、勝率が高い方から順位を決定しました。



試合開始前のオーダー交換

午後からは雨が降る予報ではあったものの、幸いにして、時折ぱらつく程度で試合に影響することなく、16面のコートでそれぞれのクラスの熱い戦いが繰り広げられました。本大会のために全国各地から参加した選手もあり、関東以外では山口県、石川県、愛知県、岐阜県などから参集していました。

また今大会では全参加者の名簿が全員に配られました。それは前大会の反省事項の中にあった、「同期だけでなく参加している先輩や後輩とも是非旧交を温めたい」、との意見を反映したもので、会場のあちこちで挨拶が交わされ昔話に花が咲いていました。

役員を含め総勢180名を超える同窓生らが会した大会は、宮下運営委員長（20期）以下の運営委員の入念な準備と円滑な運営により、加えて各クラス毎に配置され、試合状況を把握して試合を進めるクラス担当により、大きなトラブルやケガ人もなく予定された試合をすべて消化し、まさにこれぞ防大同窓会行事という素晴らしい大会になりました。



熱戦の様子 その1



熱戦の様子 その2



熱戦の様子 その3



旧交を温めながら試合観戦



同窓会から贈られた各クラス優勝杯



閉会式の様子



丸茂副会長（27期）挨拶

第26回防衛大学校同窓会テニス大会試合結果等

★レジェンドクラス（5期～7期）

- ・クラス担当：松本（5期）、龍岡（7期）
- ・試合方式：ダブルスのペアを換えて勝率で競う個人戦

（成績）

優 勝	龍岡 資臣（7期）、龍岡 睦子
第2位	-
第3位	松本 勲（5期）



レジェンドクラス記念撮影



優勝された龍岡様（中央）

★スーパーグランドシニアクラス（９期～１４期）

- ・クラス担当：湯川（１３期）、北村（１４期）
- ・試合方式：同期ペアによる個人戦

（成績）

優 勝	新田 豊／津田 秀敏 ペア（１２期）
第２位	高間 庄一／小林 英男 ペア（ ９期）
第３位	山本 政市／渚 勲 ペア（１４期）



スーパーグランドシニアクラス優勝ペア



丸茂大会会長代理からの優勝カップ授与

★グランドシニアクラス（１５期～２０期）

- ・クラス担当：原田（１８期）、千川（２０期）
- ・試合方式：各期５個ペア１０人による団体戦

（成績）

優 勝	１８期
第２位	１９期
第３位	１７期



グランドシニアクラス優勝の１８期チーム



優勝カップの授与

★シニアクラス（２１期～２６期）

- ・クラス担当：大倉（２５期）、衛藤（２６期）
- ・試合方式：各期５個ペア１０人による団体戦

（成績）

優 勝	２６期
第２位	２１期
第３位	２５期



シニアクラス優勝の２６期チーム



優勝カップの授与

★レギュラークラス（２７期～３２期）

- ・クラス担当：篠原（３０期）、廣川（３２期）
- ・試合方式：各期５個ペア１０人による団体戦

（成績）

優 勝	３０期
第２位	２８期
第３位	混成チーム



レギュラークラス優勝の３０期チーム



優勝カップの授与

大会役員等

大会役員	大会会長	村川豊（25期）（同窓会会長） 代 理 丸茂吉成（27期）
	大会副会長	村山信男（23期）
	大会顧問	井川 宏（2期） 龍岡資臣（7期）
	大会総務	森末浩史（30期） 朝倉 譲（31期）
競技委員	運営委員長	宮下今朝芳（20期）
	ディレクター	荒木淳一（27期）
	アシスタント・ディレクター	谷口弘尚（28期）
	会 計	岩崎正光（29期）
	レフリー	谷口弘尚（28期）

（事業部 31期空 朝倉 譲 記）

◇第25回防衛大学校同窓会ゴルフ大会

25回目を迎えた恒例のゴルフ大会は、今年も千葉カントリークラブ川間コースにおいて、シニアの部（12期生～21期生）が9月22日（金）に開催されました。これに先立って、9月8日（金）に予定されたレギュラーの部（22期生～32期生）については、関東東海地方に接近した台風13号の影響により、中止となりました。

シニアの部も時折雨が落ちる、非常に蒸し暑い条件の中、総勢90名が参加し、熱戦が繰り広げられました。同窓会からは、丸茂副会長が会長代理として参加しました。競技は期別対抗方式の団体戦であり、各期10名までの参加者の内、上位5名のネット成績で集計（同スコアの場合は、古い期が上位）され、結果は19期生が優勝の栄冠を手に入れました。また、12期生は今回が最後の大会参加になりました。全体の成績は、次のとおりです。

期別	NET		
	順位	SCR	AVE
12期	9	381.2	76.24
13期	5	369.8	73.96
14期	3	368.4	73.68
15期	8	374.8	74.96
16期	2	368.2	73.64
17期	4	369.2	73.84
18期	6	373.0	74.60
19期	優勝	363.8	72.76
20期	7	373.4	74.68
21期	10	381.2	7

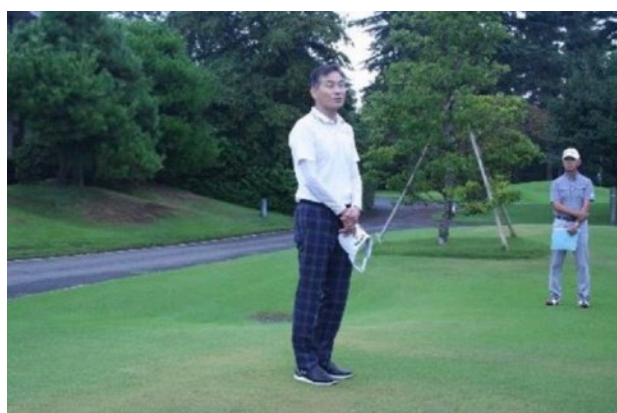
個人戦（ネット）は、19期生 佐口 光三郎さん（スコア：70.8（HC13.2））が優勝しました。また、個人戦（グロス）は、東南コース 14期生 森 勉さん（スコア：80）、南西コース 19期生 山越 孝雄さん（スコア：82）、西東コース 15期生 田母神 俊雄さん（スコア：79）が、各コースのベストグロスを獲得しました。1期生から寄贈された個人総合ベストグロス賞のカップは、15期生 田母神さんが保持者となりました。



シニアの部 参加者集合写真（12期生～21期生）



団体の部 優勝（19期生）



丸茂副会長 開会挨拶



競技委員長からの業務連絡



個人の部 ベストネット賞



個人の部 各コースベストグロス賞



本大会で引退される12期生



13期生代表による送辞

2024年度大会につきましては、最近の猛暑の影響等を考慮し、10月下旬から11月上旬での開催を予定しています。

(事業部 31期 陸 池ノ本八郎記)

◇第23回防衛大学校同窓会囲碁大会

大会は10月14日（土）、日本棋院東京本院において開催されました。参加者は全国から囲碁愛好家の同窓生72名が集まりました。

コロナ禍以前の競技は、期別対抗でランク別で競技を実施されていましたが、新型コロナの影響で従来どおりの対戦が組めないため、昨年度と同様に5名以上の期、4名以下の期でグループ分けの期別対抗とされました。

競技はグループ混成で4名の対局組を編成し、総当たり3回戦を行い、4回戦目は各グループの同順位同士で対戦しました。

大会結果です。期別対抗は、昨年に引き続き、5名以上チームは9期、4名以下チームは14期が優勝しました。また全勝者は8名でした。

来年の大会は、10月19日（土）の予定です。

大会結果

5名以上チーム 優勝：9期
準優勝：18期
3位：6期

4名以下チーム 優勝：14期
準優勝：20期
3位：19期



5名以上チーム優勝の9期チーム



4名以下チーム優勝の14期チーム

個人賞(4局全勝者)8名； 清水様(4期), 山口様(6期), 江本様(9期), 後藤様(11期), 永岡様(14期), 中治様(14期), 村松様(18期), 大林様(29期)



高比競技委員長 開会式挨拶



対局を観戦する佐藤副会長



佐藤副会長 閉会式挨拶

(事業部 記)

◆会長ルーム・活動記録

◇令和５年度 防衛大学校入校式典

令和５年４月５日（水）、防衛大学校 本科第７１期学生５２２名（留学生２３名外数）、理工学研究科前期課程第６２期学生５３名（留学生１名外数）、同後期課程第２３期学生１１名（留学生１名外数）、総合安全保障研究科前期課程第２７期学生１９名及び同後期課程第１５期学生３名の入校式典が記念講堂で挙行され、村川豊同窓会長が出席しました。

今年も新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から来賓の参加が限定されるとともに、午餐会が中止となりましたが、これまでに中止されていたホーム・カミング・デー２（ＨＣＤ２）の４年ぶりの再開や、参加数の制限はあるものの入校学生のご家族の参加など、新型コロナウイルス感染症拡大前の入校式典の姿に戻りつつあるようでした。

入校式典は、井野俊郎防衛副大臣のご臨席のもと、多数のご来賓が参列される中で実施され、入校学生の任命、宣誓、申告ののち、久保文明防衛大学校長から「自衛官としてわが国の安全保障のために人生を捧げるという決意をもって本学に入校された皆さんには心から敬意を表したいと思います。ぜひこの崇高にして重要な任務を全うしてください。」と式辞を述べられました。

来賓として出席された井野俊郎防衛副大臣は、「変化の激しい世界で、変化の速い科学技術を駆使し、我が国の平和と独立のために活躍することを期待する。」と述べられるとともに、「国防を担う崇高な使命をもって入校された皆さんを頼もしく思います。入校者のうち、１０３名が女子学生ということで、性別を問わず切磋琢磨してほしい。」との祝辞を贈られました。

同じく来賓として出席された南雲憲一郎統合幕僚副長は、吉田圭秀統合幕僚長の祝辞を代読され、「抑止力の一翼を担う国防という崇高な使命を目指して入校した学生諸官に心からの敬意を表します。防大は、戦略的なリーダーシップの素地を学ぶことができる唯一の学校であり、入校間にＭ（ミッション：使命感）、Ｖ（ビジョン：構想力）、Ｐ（パッション：情熱）のＭＶＰを涵養することを要望します。留学生は祖国のかけがえのない宝物であり、共に切磋琢磨してください。」と述べられました。

入校式典後、観閲式が陸上競技場で実施され、祝賀飛行、観閲行進、ドリル演技などが本式典に華を添えました。

また、入校式典及び観閲式には、防大のホームカミングデー２（ＨＣＤ２）行事として、防大第１０期及び第１１期の卒業生の方々が、ご家族を含め約２２０名とこれまでになく多数来校されました。



井野防衛副大臣に対する栄誉礼



久保学校長の式辞



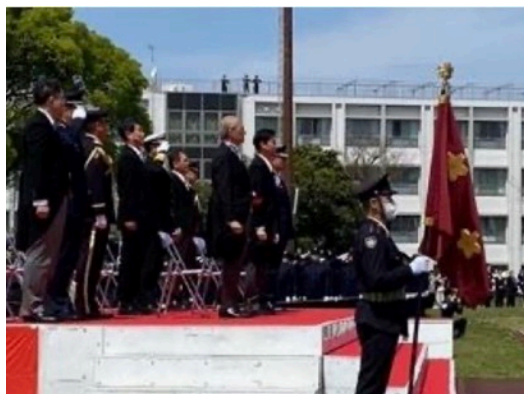
南雲統幕副長の祝辞



入校式に参列する来賓



入校式に参加する第10・11期卒業生



観閲官に対する栄誉礼



観閲部隊指揮官の深澤学生



学生隊の観閲行進



観閲式に参加する第10・11期卒業生

(31期陸 小田英明 記)

◇令和５年度顕彰碑献花式への参加

令和５年１１月１１日（土）、村川会長は、防衛大学校開校記念祭に合わせて実施された令和５年度顕彰碑献花式に参列しました。

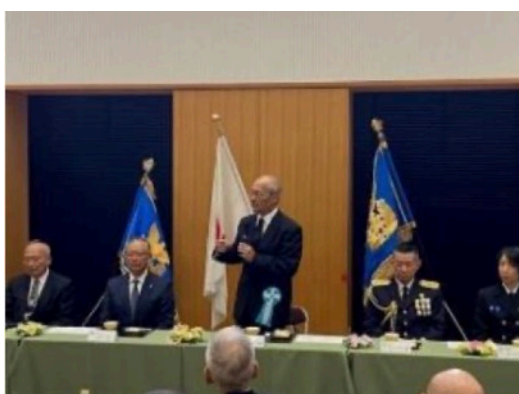
１１００から人文科学館南側顕彰碑前において実施された顕彰碑献花式には、同窓各期代表等６０名も参列し、国歌斉唱、儀仗・黙とう、顕彰の辞、追悼の辞に続いて献花が行われ、１１５柱の御霊に哀悼の誠を捧げました。本年度は新たに５名の顕彰者が祀られ、厳粛に式が挙行される中、久保学校長の顕彰の辞に引き続き、会長は追悼の辞を奉読し、御霊の安らかならんことと御遺族のご健勝を祈念しました。

式終了後、参列された８名のご遺族は、資料館２階の顕彰室へ案内され、顕彰室の説明を受けられました。この間、会長は、校長と共に同行し、その後、１２００からの御遺族との会食に参加しました。

あわせて、顕彰碑献花式に参列した同窓各期代表等との会食を実施して、同窓会各会員相互の親睦・交流を図りました。本会食は、防大同窓会が主催し、同小原台事務局支援の下、山坂総務部長の司会で進行し、各期生会代表のうち、２期～６６期までの４０名が出席しました。御遺族との会食終了後、久保学校長、村川会長、齋藤協力会会長が加わり、久保学校長から、令和５年度開校祭のテーマである「Reborn～新時代創世と継承～」に込められた在校生の思いと、コロナ禍の環境に適應した防大の新たな取り組みについて紹介がありました。また、村川会長からは、同窓会の活動状況（HVD、HCD、HCD2）について紹介するとともに、昨今の同窓会費納入状況、会費納入促進施策、財政状況の今後の好転の見通しについて説明し、各期生会長等にご理解を訴えました。



顕彰碑献花式における追悼の辞



会食における久保学校長の挨拶



会食における村川同窓会長の挨拶

（３２期陸 小谷琢磨 記）

◇令和５年度開校記念祭への参加

令和５年１１月１２日（日）、村川会長は、防衛大学校で実施された第７１回開校記念祭行事に参加しました。

今年度の開校記念祭は、令和元年度以来４年振りとなる通常開催で、前日の１１日（土）から一般公開も行われました。日曜日に行われた記念式典・観閲式及び棒倒し競技会には、防大発表によると１５,０００人を超える来場者がありました。本年度の開校記念祭は７１回目を数え、コロナ禍における様々な制約から解放され、これまでの伝統を継承しつつ、未来に向けた新しい防大に生まれ変わろうということから、学生発案により統一テーマは「Reborn～新時代創世と継承～」とされたとのこと。記念式典・観閲式は、ここ最近の夏日から一転、厳しく冷え込む霧雨の中、久保学校長が観閲官となり、学生隊学生長の指揮の下、約１,５００名の学生が整列し、堂々たる行進を披露しました。この際、卒業生を中心とした飛行部隊による祝賀飛行が式典に花を添えました。祝賀飛行は、卒業生らが操縦する陸海空自衛隊の各種航空機が参加して実施されましたが、Ｆ－１５は低空の雲の中に隠れてしまい、観客はやや残念な様子でした。

続く祝賀会では、会長が来賓を代表して祝辞と乾杯を行い、学校長をはじめ教職員の皆様の学生教育に対する日頃の御尽力に対する敬意と謝意を伝えるとともに、同窓会として引き続き母校の充実・発展のための支援を積極的に実施していくことを強調しました。

棒倒しでは、前日の予選を勝ち上がった２大隊と４大隊の決勝が行われ、１分３０秒を超える激しい戦いの末、２大隊が優勝しました。



開校記念式典・観閲式



祝賀会における会長祝辞・乾杯



棒倒し決勝

(31期陸 池ノ本八郎 記)

◇令和5年度代議員会結果報告

防衛大学校同窓会会員の皆様におかれましては、日頃より防衛大学校同窓会に対しましてご支援ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

さて、令和5年度代議員会（講演会を含む）は令和6年3月2日(土)、令和5年度事業計画に基づき、完全Web方式により実施させて頂きました。

この結果、「令和4年度同窓会事業報告・同会計決算報告・同会計監査報告」「令和6年度同窓会事業計画（案）・同事業予算（案）」「令和6年度同窓会役員の選出」の3件の議案についてご承認いただきましたことをここに報告させていただきます。

防衛大学校は久保学校長のリーダーシップの下、引き続き「世界に誇る士官学校」を目指し、着実に歩みを進めております。昨年11月には、4年ぶりに一般開放による開校記念祭を開催する等、学校長以下学生と職員が一丸となりコロナ後の環境に適合した新たな取り組みに邁進しております。また、多様な国からの留学生を多数受け入れるとともに、多くの学生が、短期・長期の国外留学を行い、国際士官候補生会議を主催するなど、国際交流の拡大にも配慮されています。

防大同窓会は第1期生を中心に昭和36年1月21日に設立され、本年63年目を迎えました。これまで、諸先輩、各期の役員、歴代の事務局員、そして各期生会や地域支部の皆様の献身的なご協力の下、活動して参りました。現在の会員数は、現役1万1,700名、OB1万4,000名、留学生450名の計2万6千名であり、OBが現役自衛官数を超え、会員数的には安定した組織になっております。

一方、防大1期生会、2期生会、4期生会、そして昨年12月には航空第3期生会が組織的な活動に終止符を打たれました。防大同窓会も一つの節目を迎えているものと感じております。

また、昨年の代議員会でも説明しましたとおり、近年の卒業生の会費納入率は極端に低下しております。同窓会事務局としては、一層の経費削減に努めているところですが、母校支援のため各種事業を継続するため、資産の一部を取り崩して充当せざるを得ない状況となっております。原因としては、コロナ禍において学生生活を大きく制限されたことが、学生の同窓生意識や価値観にも影響を及ぼしたのではないかと考えられますが、私どもも、この機会に「同窓会はなぜ必要なのか、何のためにあるのか」という原点に立ち返り、若い卒業生の皆さんに理解をいただき会費を納入いただけるよう、引き続き説明を尽くして参りたいと考えております。

結びに、代議員をはじめ会員の皆様の同窓会活動に対します益々のご理解・ご協力を重ねてお願い申し上げます。代議員会結果の報告とさせていただきます。

令和6年3月末日

防衛大学校同窓会 会長 村川 豊



令和5年度代議員会の状況



講演会の状況（講師：山崎前統合幕僚長）

◇令和５年度防衛大学校卒業式典

令和６年３月２３日(土)、防衛大学校 本科第６８期学生、理工学研究科前期課程第６１期学生、同後期課程第２１期学生、総合安全保障研究科前期課程第２６期学生及び同後期課程第１３期学生に対する卒業証書授与式及び卒業式典が岸田内閣総理大臣ご臨席のもと挙行され、村川豊同窓会長が出席しました。

今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のための制限が全て解除され、これまで中止されていた午餐会が５年ぶりに開催されました。また、昨年より再開されたHCD（ホームカミングデー）の行事も行われ、本科第２３期卒業生が卒業式典に出席しました。なお、予定されていた卒業式典後の観閲式は、雨天のため中止されました。

久保学校長が本年度の卒業生である本科学生４０１名及び研究科学生７９名（８カ国２８名留学生を含む）の学生一人ひとりに卒業証書を手渡され、式辞において「入学後にはじまった約３年にわたる新型コロナウイルスへの対応の中で苦労されたが、よく事態を理解し協力してくれたことに感謝したい。自信と誇りを持ち、謙虚な気持ちを忘れず、常に人格の陶冶に心がけ、上司の信頼と部下の尊敬を受けるに足る品格と徳性を身に付けるよう不断の努力を傾注してもらいたい。」と述べられました。

岸田内閣総理大臣は、「諸君の卒業までの比類なき努力と不屈の精神力に心からの賛辞を送りたい。幹部自衛官として任官した後、任務にあたる諸君自身が防衛力の中核であり、諸君の努力が防衛力の強化に不可欠であること、諸君の存在そのものが抑止力となることを忘れないで欲しい。国民に期待され信頼される自衛官にふさわしい高い規律をもって任務に当たって欲しい。」と訓示されました。

続いて、木原防衛大臣から「防衛力の中核である自衛隊員が能力を発揮できるよう働きやすい環境を整備することが必要不可欠であり、諸君にはチームのリーダーとしてふさわしい立ち振る舞いや心構えが求められている。これから諸君を待ち受けているのは新たなチャレンジであり前例踏襲では生き抜くことができない新しい時代にふさわしい諸君の一層の努力を期待する。」と訓示されました。

来賓代表・宇宙航空研究開発機構(JAXA)理事長 山川宏氏から「小惑星探査機「はやぶさ」等の研究開発の過程で学んだ経験から、情熱を持って仕事に徹底的に取り組むこと、大勢の仲間とその情熱を共有することを皆様の応援団の一人としてメッセージを送りたいと思います。近い将来、皆様と働く日々を楽しみにしております。」との言葉を贈られました。

卒業生からは、「入校当初から約３年にわたり新型コロナウイルス感染症拡大防止の影響を強く受け、学科教育、訓練、校友会活動及び各種学校行事において大きな制約があり不安と闘いながら生活してきたが、これを支えてきたのが先輩、後輩及び同期の絆であった。我が国を取り巻く安全保障環境が一層厳しさを増す中、国防という誇り高き使命を自覚し日々精進して今後職務に邁進していく」との力強い答辞があり、その決意を胸に、学生歌斉唱の後に帽子を高々と舞い上げ会場を後にしました。

続いて、卒業生は陸・海・空の制服に着替え、一般幹部候補生の任命・宣誓式では、各要員別に陸曹長、海曹長、空曹長に任命され、一般幹部候補生を命ぜられました。そして、各要員の代表が宣誓を行い、岸田内閣総理大臣に宣誓書を手渡しました。

卒業式典終了後、学生食堂において午餐会が開かれ、木原防衛大臣、国会議員に引き続き、村川同窓会長が祝辞を述べ、「卒業生の皆さんの同窓会への入会を心から歓迎したい。同期生及び先輩後輩との絆を糧にして困難に立ち向かってほしい。」と激励しました。



岸田内閣総理大臣に栄誉礼



卒業証書授与

(31期陸 眞弓康次 記)

◆連絡事項

◇令和4年度防衛大学校同窓会決算書

【単位 円】

区分	事業等	04年度予算	04年度決算額	差異	備考
収入	同窓会費	23,912,000	5,580,100	-18,331,900	
	預貯金金利・国債金利	1,630,000	1,634,278	4,278	
収入	雑収入	170,000	183,350	13,350	
	資産からの振替	0	0	0	
収入	収入合計①	25,712,000	7,397,728	-18,314,272	
一般会計	母校の充実・発展への寄与				
	各種競技会支援	390,000	370,580	-19,420	メダルケース代等
一般会計	期生会発表会等支援	700,000	604,190	-95,810	期生会設立支援金、ダンスパーティー支援等
	学生の部隊実習支援	260,000	0	-260,000	
一般会計	顕彰碑献花式支援	510,000	223,238	-286,762	献花費、顕彰碑銘板作成費等
	開校記念祭支援	2,070,000	2,035,723	-34,277	支援金、祝儀等
一般会計	校友会対外活動支援	1,000,000	1,002,184	2,184	支援金、通信費
	学術向上策支援	210,000	11,680	-198,320	表彰副賞代等
一般会計	同窓生著作等の寄贈	70,000	102,284	32,284	図書購入費等
	国際交流支援	1,200,000	890,800	-309,200	留学生学業基盤整備支援金、記念品
一般会計	国内交流支援	40,000	0	-40,000	
	OBによる学生補導教育支援	40,000	0	-40,000	
一般会計	小計②	6,490,000	5,240,679	-1,249,321	
	会員相互の親睦交流				
一般会計	同窓会HPの運営	450,000	695,770	245,770	PC管理費、HPサポート費等
	会員の慶弔業務	350,000	325,353	-24,647	生花、弔電代等
一般会計	各種競技大会による交流	270,000	173,170	-96,830	ゴルフ、テニス、囲碁大会支援金等
	卒業留学生との交流	30,000	0	-30,000	
一般会計	HVD支援（#45）	330,000	308,990	-21,010	支援金等
	HCD支援（#23）	360,000	336,936	-23,064	支援金等（#22支援金返金）
一般会計	HCD2支援（#10、#11）	130,000	111,410	-18,590	支援金等
	講演会・懇親会の実施	800,000	4,930	-795,070	交通費
一般会計	小計③	2,720,000	1,956,559	-763,441	
	社会活動への寄与				
一般会計	安全保障講座支援	100,000	100,440	440	講座への協賛金等
	小計④	100,000	100,440	440	
一般会計	会務運営基盤の充実				
	代議員会の実施	2,100,000	623,918	-1,476,082	印刷費、PC購入費、交通費、通信費等
一般会計	同窓会名簿の維持	65,000	49,960	-15,040	交通費
	期生会名簿の作成支援	40,000	0	-40,000	
一般会計	会費納入の促進	460,000	561,392	101,392	交通費（各幹候校等）、通信費等
	地域支部等の活性化	580,000	0	-580,000	
一般会計	防衛医大同窓会との連携	20,000	0	-20,000	
	Web会議システムの維持・管理	175,000	0	-175,000	
一般会計	小計⑤	3,440,000	1,235,270	-2,204,730	
一般会計	検討事項				
	国際交流関連業務の検討	50,000	10,280	-39,720	交通費
一般会計	事務局勤務負担軽減	0	0	0	
	同窓生交流検討	0	0	0	
一般会計	小計⑥	50,000	10,280	-39,720	
一般会計	支出（維持管理費を除く）合計⑦ （②+③+④+⑤+⑥）	12,800,000	8,543,228	-4,256,772	
	維持管理				
一般会計	事務費	750,000	707,954	-42,046	消耗品費、購読料、等
	事務員雇用費	1,584,000	1,584,000	0	132,000円/月×12月
一般会計	通信費	300,000	292,315	-7,685	電話、インターネット、郵便等経費
	交通費	510,000	496,450	-13,550	事務局員の交通費等
一般会計	会議費	220,000	163,523	-56,477	お茶代等
	事務局室賃貸費	5,400,000	5,439,523	39,523	賃貸料、電気代等
一般会計	小原台事務局運営費	150,000	52,652	-97,348	ポケットWi-Fi等
	小計⑧	8,914,000	8,709,417	-204,583	
一般会計	支出合計⑨（=⑦+⑧）	21,714,000	17,252,645	-4,461,355	
	予備費	予備費⑩	3,998,000	0	
一般会計	支出計⑪（=⑨+⑩）	25,712,000	17,252,645	-8,459,355	
	令和4年度収支（①-⑪）		-9,854,917		約985万円：流動資産から振替え

区分		事 業 等		04年度予算	04年度決算額	差 異	備 考
特別会計	収入	「防衛の務め」再刊行	書籍売上金等（防大委託売店より）	0	114,698	114,698	
			小原台事務局委託金戻入	1,969,190	1,969,190	0	
			収入計（①）	1,969,190	2,083,888	114,698	
	支出	「防衛の務め」再刊行	購入費（中央公論社へ）	880,000	880,000	0	500冊購入
			委託料（防大委託売店へ）	28,050	28,050	0	振込手数料600円含む
			支出計（②）	908,050	908,050	0	
令和4年度収支（③＝①－②）			1,061,140	1,175,838	114,698	約117万円：来年度への繰越金	

区分		事 業 等	04年度予算	04年度決算額	差 異	備 考
特別会計	収入	防大75周年事業支援準備	1,500,000	0	1,500,000	R4の一般会計が赤字決算のため、0円
		収入計（①）	1,500,000	0	1,500,000	
	支出	防大75周年事業支援準備	0	0	0	
		支出計（②）	0	0	0	
			令和4年度収支（③＝①－②）	1,500,000	0	1,500,000

区分	事 業 等		04年度予算	04年度決算額	差 異	備 考
特別会計	収入	防大75周年事業支援準備（前年度繰越）	0	0	0	
		収入計（①）	0	0	0	
	支出	防大75周年事業支援準備	600,000	1,138,610	538,610	レリーフ
		支出計（②）	600,000	1,138,610	538,610	
令和4年度収支（③＝①－②）			-600,000	-1,138,610	-538,610	約113万円：流動資産から補填

区分	事 業 等		04年度予算	04年度決算額	差 異	備 考
寄 付 会 計	収 入	寄付金	0	79,000	79,000	
		収入計 (①)	0	79,000	79,000	
	支 出	寄付金	0	0	0	
		支出計 (②)	0	0	0	
	令和4年度収支 (③=①-②)			0	79,000	79,000

◇令和6年度期生会長・代議員名簿

2024年3月31日現在

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏 名	海：氏 名	空：氏 名	氏名	要員
1	深山 明敏 (*)	陸					
2	高岩 利彦 (*)	陸					
3	西元 徹也	陸	及川 雅道	手塚 正水	出口 哲夫	野本 眞二	陸
4	金田 孝之 (*)	空					
5	白石 一郎	陸	久光 禧敬	富 一郎	齋藤 賢爾	浅野 勇蔵	陸
6	阿部 英輔	陸	池田 勝	福塚 啓二	星野 元宏	福塚 啓二	海
7	杉田 明傑	陸	石橋 穰	高木 基博	伊藤 文夫	中村 暁	陸
8	吉川 武秀	空	山崎 幹夫	山本 紀義	安田 紘	尾頭 誠	空
9	藤田 幸生	海				前川 忠明	海
10	石飛 勇次	陸	村松 洋一	坂東 勝昭	川田 哲雄	村松 洋一	陸
11	石川 亨	海	洞澤 佳廣	竹村 訓	赤羽 益三	後藤 健次	陸
12	相田 哲彦	空	藤本 四郎	串田 貫治	橋本 康夫	高岡 邦夫	空
13	山下 輝男	陸	篠田 芳明	新宮領 篁	花岡 芳孝	菅原 純	陸
14	河野 芳久	陸	寄田 修	齋藤 隆	稲葉 憲一	有井 一弘	空
15	林 直人	陸	瓦谷 育夫	平山 爲祥	江口 啓三	佐藤 誠喜	陸
16	折木 良一	陸	石川 由喜夫	橘 恒紀	堀 好成	石川 由喜夫	陸
17	赤星 慶治	海	廣瀬 誠	赤星 慶治	永田 久雄	石村 澄雄	海
18	外薗 健一朗	空	植木 美知男	色川 喜美夫	長尾 齊	長尾 齊	空
19	岩崎 茂	空	師岡 英行	宮浦 弘兒	下平 幸二	風間 敏榮	陸
20	佐藤 貞夫	陸	西村 智聡	加藤 耕司	渡邊 至之	今井 恵治	陸
21	河野 克俊	海	荒川 龍一郎	山本 高英	小野田 治	山本 高英	海
22	宮下 寿広	陸	田原 昭彦	畑中 裕生	福井 正明	石野 貢三	空
23	岩田 清文	陸	藤井 貞文	福本 出	清藤 勝則	岩崎 親裕	陸
24	杉山 良行	空	武内 誠一	原田 哲郎	半澤 隆彦	半澤 隆彦	空
25	高鹿 治雄	海	岡部 俊哉	河村 正雄	吉田 浩介	徳丸 伸一	海
26	尾上 定正	空	深津 孔	堂下 哲郎	尾上 定正	池畠 暢也	空
27	小林 茂	陸	小林 茂	副島 尚志	橋本 尚典	穂積 文孝	空
28	田浦 正人	陸	田浦 正人	真鍋 浩司	渡邊 博史	田浦 正人	陸
29	馬場 邦夫	陸	中村 浩之	中尾 剛久	村上 和彦	時藤 和夫	空
30	堀切 光彦	陸	山崎 繁	時久 寛司	上ノ谷 寛	篠原 啓一郎	陸
31	前田 忠男	陸	山口 和則	今村 靖弘	後藤 雅人	山口 和則	陸
32	阿部 睦晴	空	池田 頼昭	梶元 大介	柴田 利明	植村 茂己	空
33	中塚 千陽	空	山根 寿一	齋藤 聡	沖野 克紀	沖野 克紀	空
34	佐藤 信知	空	荒井 正芳	大西 哲	小笠原 卓人	小笠原 卓人	空
35	稲月 秀正	空	戒田 重雄	伍賀 祥裕	吉村 一彦	熊谷 三郎	空
*指定窓口会員							

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏名	要員	陸：氏 名	海：氏 名	空：氏 名	氏名	要員
36	寺崎 隆行	空	松永 浩二	石巻 義康	寺崎 隆行	松永 浩二	陸
37	宇佐美 和好	空	小川 隆宏	浦口 薫	宇佐美 和好	宇佐美 和好	空
38	石井 浩之	空	浅賀 政宏	濱崎 真吾	白井 亮次	山崎 武志	空
39	湯下 兼太郎	陸	湯下 兼太郎	平田 利幸	中川 一	湯下 兼太郎	陸
40	清水 徹	海	梨木 信吾	川野 邦彦	石引 大吾	兵庫 剛	陸
41	堤田 和幸	海	小林 貴	堤田 和幸	中谷 大輔	堤田 和幸	海
42	富川 輝	空	高橋 誠	佐瀬 智之	富川 輝	小黒 正隆	空
43	鎌田 淳	空	澤 繁実	江畑 康孝	志津 雅啓	志津 雅啓	空
44	高橋 秀典	海	鈴木 攻佑	阿部 直樹	原田 理	阿部 直樹	海
45	青山 佳史	陸	庄司 秀明	岡澤 智和	坂田 靖弘	庄司 秀明	陸
46	臼井 洋太郎	海	菊池 裕紀	加藤 太輔	和田 夏樹	向 康司	海
47	吉水 憲太郎	陸	清田 裕幸	笠原 健治	中里 悠花	清田 裕幸	陸
48	和田 嵩一	海	桐谷 高弘	柏木 祐一郎	齋藤 真吾	柏木 祐一郎	海
49	山上 剛史	空	松浦 秀俊	小沼 洋祐	山上 剛史	山上 剛史	空
50	吉井 拓也	陸	益田 一字	八木 佑己	阿部 竹浩	益田 一字	陸
51	鬼塚 勇	陸	鬼塚 勇	林 大佑	森嶋 倫	鬼塚 勇	陸
52	成田 優	陸	成田 優	岡田 航	荒木 敬	成田 優	陸
53	瀧田 卓	空	江嶋 宏次	松崎 圭祐	来栖 克則	瀧田 卓	空
54	金澤 慧人	空	角丸 公康	垣内 隼斗	内藤 昌孝	金澤 慧人	空
55	若月 豪	陸	若月 豪	中村 友哉	加治 政樹	若月 豪	陸
56	松尾 聡一郎	陸	松尾 聡一郎	田中 結貴	舟津 貴正	松尾 聡一郎	陸
57	我妻 国明	陸	久保 翔平	杢村 駿明	大藪 秀斗	我妻 国明	陸
58	戸口 真	海	秋島 一弥	浦山 修太朗	河野 健	戸口 真	海
59	屋代 昌也	陸	渡邊 一生	馬渡 淳司	宮川 啓一	屋代 昌也	陸
60	浜野 広大	陸	田村 洋人	畠山 尚己	庄司 和正	今尾 友哉	陸
61	久米井 勇馬	空	池上 好古	神作 友陽	工藤 将人	松本 龍二	海
62	上中 龍基	空	神木 康誠	唐川 航輝	江打 諒馬	熊木 礼於奈	陸
63	武石 太一	海	筒井 健司	笠原 豪	久保田 祥平	舟林 翼	陸
64	梅村 俊海	海	須田 悠介	森田 雄也	小川 隼人	門馬 明富	陸
65	吉田 敦	海	横山 慶次郎	坂東 涉伍	山本 悠馬	小俣 裕紀	陸
66	石井 涼子	海	大山 智也	佐藤 日向子	町田 光	佐地 祥太郎	陸
67	堀越 智也	海	嶋田 透哉	高田 虎哉	八尋 翼	堀越 智也	海
68	佐藤 総太郎貴久	陸	小田 健人	深澤 礼香	大久保 勇志		

◇令和6年度地域支部等役員名簿

所属支部	役職	氏名	期	要員
北海道地域支部	支部長	加藤 幸治	14	陸
	事務局長	—	—	—
東北地域支部	支部長	小松 宏行	21	陸
	事務局長	若生 明智	27	陸
栃木地区支部	支部長	正岡 富士夫	15	空
	事務局長	正岡 富士夫	15	空
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5	陸
	事務局長	小島 健二	14	空
北陸拡大地区支部	支部長	濱谷 隆平	6	陸
	事務局長	濱谷 隆平	6	陸
東海拡大地区支部	支部長	今枝 隆昌	19	陸
	事務局長	川村 大介	25	海
関西地域支部	支部長	川瀬 昌俊	26	陸
	事務局長	澤井 宏保	31	陸
鳥取地区支部	支部長	吉岡 元	10	空
	事務局長	山本 洋	21	陸
島根地区支部	支部長	西村 充雄	25	陸
	事務局長	田中 秀文	35	陸
岡山地区支部	支部長	物部 明德	22	空
	事務局長	植月 將元	22	陸
広島地区支部	支部長	佐藤 正志	22	海
	事務局長	土肥 弘実	25	海
山口地区支部	支部長	峰岡 偉津夫	15	海
	事務局長	落合 直巳	21	陸
四国拡大地区支部	支部長	福田 忠典	11	陸
	事務局長	松村 朝生	29	陸
徳島地区支部	支部長	福田 忠典	11	陸
	事務局長	山崎 忠雄	19	陸
香川地区支部	支部長	宇草 茂	18	陸
	事務局長	松村 朝生	29	陸
愛媛地区支部	支部長	小原 友弘	21	陸
	事務局長	津田 敦彦	38	空
高知地区支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	川田 公一	16	空
九州地域支部	支部長	野田 文久	24	陸
	事務局長	田代 勉	25	陸
福岡地区支部	支部長	野田 文久	24	陸
	事務局長	田代 勉	25	陸
佐賀地区支部	支部長	福井 秀平	23	陸
	事務局長	福岡 龍一郎	26	陸
長崎地区支部	支部長	大平 慎一	20	海
	事務局長	広井 豊明	21	海
熊本地区支部	支部長	光永 邦保	22	陸
	事務局長	阿部 健司	19	陸
大分地区支部	支部長	藤田 太	20	陸
	事務局長	山崎 真一	32	陸
宮崎地区支部	支部長	川崎 朗	24	陸
	事務局長	黒木 忠広	27	海
鹿児島地区支部	支部長	柴村 敬二	18	陸
	事務局長	樺山 一孝	29	陸
沖縄地域支部	支部長	渡名喜 邦夫	21	海
	事務局長	—	—	—
小原台クラブ	会長（支部長）	宮田 晃	25	海
	事務局長	及川 正稔	28	陸
桜華会	会長（支部長）	塚口 千枝（平松）	40	陸
	事務局長	嶋津 悠加（黒田）	45	空

◇令和6年度同窓会本部役員名簿

職 名		氏 名	期	要 員
会長		村川 豊	25	海
副会長		小林 茂	27	陸
		佐藤 誠	26	海
		丸茂 吉成	27	空
理 事	事務局長	上尾 秀樹	29	陸
	事務局長補佐	鵜居 正行	31	陸
		中西 正人	27	海
		山田 真史	28	空
	防大教授	板宮 敬悦	29	陸
	統幕総務部長	青木 誠	35	陸
	陸幕監理部長	岸良 知樹	38	陸
	海幕総務部長	稲田 丈司	34	海
	空幕人事教育部長	倉本 昌弘	37	空
会計監事		星指 隆	27	陸
		間瀬 元康	28	陸
		橋口 信吾	29	海
		藤永 映章	27	空

◇令和6年度事務局員名簿

(2024年3月18日現在)

職 名			氏 名	期	要 員
総務	部長		山坂 泰明	30	陸
	副部長		佐藤 幸喜	30	空
	担当	総務 新規事業	真弓 康次	31	陸
			小田 英明	31	陸
			小俣 和之	31	海
			荒木 哲哉	31	空
			津田 昌隆	31	空
	担当補佐	総務 会議運営 新規事業	小谷 琢磨	32	陸
			佐々木 俊哉	32	陸
			石田 伸介	32	海
川波 清明			32	空	
川村 浩和			32	陸	
		坂尾 陽子	常勤		
人事	部長		宮本 裕徳	30	空
	副部長		淵崎 直樹	30	海
	担当	川上 陽	31	陸	
		栗田 昌範	31	海	
		野澤 隆一	31	空	
	担当補佐	福重 毅尚	32	陸	
		芳賀 基	32	海	
		木場 隆治	32	空	
経理	部長		浦野 与志生	30	陸
	副部長		小山 武徳	30	空
	担当	佐野 光	31	陸	
		今村 靖弘	31	海	
	担当補佐	深谷 徳彦	32	陸	
		本山 泰之	32	海	
事業	部長		大西 正浩	30	陸
	副部長		時久 寛司	30	海
	担当	HCD/HVD	永井 克征	31	陸
		HCD2	伊藤 辰彦	31	海
		テニス／支部	朝倉 譲	31	空
		囲碁等	前田 丈典	31	海
		ゴルフ／講演	池ノ本 八郎	31	陸
	担当補佐	HCD/HVD	榮村 佳之	32	陸
		HCD2	佐藤 広憲	32	海
		テニス／支部	田中 康彦	32	空
		囲碁等	山越 博道	32	海
		ゴルフ／講演	西川 亘	32	陸
広報	部長		岩崎 仁彦	30	空
	副部長		池田 五十二	30	空
	技術顧問		村田 和美	17	陸
	SA（システム事項）		時藤 和夫	29	空
	担当	HP	生田 孝治	31	空
			森永 秀作	31	陸
		機関紙	岡部 勝昭	31	陸
			萬 昌裕	31	空
		人材バンク	徳橋 浩志	31	陸
			佐藤 恭弘	31	海
		担当補佐	HP	和田 政	32
	八木 聖一郎			32	陸
	機関紙		阿部 昌平	32	陸
			小暮 幹太	32	空
	人材バンク		川崎 誠二	32	陸
		浅野 潔	32	海	

◇令和6年度小原台事務局員名簿

(2024年4月1日現在)

職 名		氏 名	期	要 員	
事務局長		久保田 隆裕	38	空	将補
事務局長補佐		宇仁 健一郎	34	海	1 佐
		荒井 将人	37	空	1 佐
		川口 貴浩	40	陸	1 佐
総務部	部長	中澤 信一	28	海	2 佐
	補佐	鶴貝 英俊	38	空	2 佐
人事部	部長	別府 万寿博	36	空	文官
	補佐	久保 明義	42	陸	2 佐
		谷口 大和	60	海	1 尉
経理部	部長	小林 伸嘉	36	空	2 佐
	補佐	山崎 武志	38	空	文官
事業部	部長	村上 強一	31	空	2 佐
	補佐	松木 昭彦	37	陸	2 佐
		津田 武志	45	空	2 佐
		平田 健志	63	空	1 尉
広報部	部長	越山 光正	42	陸	1 佐
	補佐	永田 和人	38	陸	2 佐

◆編集後記

新型コロナウイルスは、5月から季節性インフルエンザと同じ第5類に分類されました。この変更に伴い、各種対策は維持ししつつも、各種同窓会行事はほぼ予定通りに進められる様になりました。ホームページにご寄稿いただきました方々、各行事及び事業にご支援いただきました皆様方のお蔭様をもちまして、令和6年度機関紙「小原台だより」を上梓することができました。この場をお借りして心より厚く御礼申し上げます。

「小原台だより」第31号は、電子版として第9号の発刊となりました。引き続きホームページアーカイブとして、記録保存の意義を重視し、同窓会の年度の総括として役立つように努めてまいります。今後とも電子版「小原台だより」のご愛顧と、ご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

(防衛大学校同窓会本部事務局 機関紙担当記)